

篠山市

篠山城旧三の丸跡

—篠山郵便局庁舎簡易小増築工事に伴う発掘調査報告書—

2006年2月

兵庫県教育委員会

篠山城旧三の丸跡

—篠山郵便局庁舎簡易小増築工事に伴う発掘調査報告書—



史跡 篠山城跡全景（南西から） 平成14年7月撮影



調査地遠景（南から） 平成14年7月撮影

巻首図版2は
公開していません



篠山城旧三の丸跡 第41次調査 出土遺物



出土遺物 織部焼



出土遺物 染付（中国模製）



出土遺物 染付（京焼系）



出土遺物 青磁（王地山焼・三田焼）



出土遺物 陶器（京焼・備前焼）

出土遺物 施釉陶器



(丹波焼)



(丹波焼)



(瀬戸・美濃焼)

例 言

1. 本書は、篠山市北新町に所在する篠山城田三の丸跡 第41次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、篠山郵便局庁舎簡易小増築工事に伴うもので、平成9年度に郵政省近畿郵政局（現、日本郵政公社）の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施したものである。
3. 出土品整理事業は、平成16・17年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区）および同 魚住分館（明石市魚住町）において実施した。
4. 本書で示す標高値は、東京湾平均海水準（T、P）を基とし、方位は座標北を示す。
5. 本書の挿図第3図「篠山城跡の位置と周辺の遺跡」は、国土地理院発行の1/25,000「篠山」・「福住」をそれぞれ使用した。
6. 本書で使用した航空写真（巻首図版1）および天保8（1837）年の『丹州篠山城郭之繪圖』（個人蔵巻首図版2）は、篠山市教育委員会より借用したものであり、それぞれ関係機関の了承を得て、掲載した。
7. 本書に掲載した遺物には、通し番号—木製品にはWを付して分類—をつけており、遺物番号は本文・挿図・写真図版ともに統一している。
8. 遺物の写真は、挿図中に実測図と併せた遺物写真（第12図～第14図）は株式会社文化財サービスが、その他の遺物写真については、株式会社アコードが撮影したものである。
9. 土層の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1996年版を使用した。
10. 本書の執筆は、本文目次に記した通り、池田正男・岡田章一・山下史朗・仁尾一人が分担し、編集は尾鷲都美子の補助を得て、仁尾が行った。
11. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
12. 発掘調査および整理作業にあたって、下記の機関にご協力・ご指導をいただきました。記して感謝いたします。

篠山市教育委員会



第1図 遺跡の位置

本文目次

第1章 調査の経緯と体制	
第1節 調査に至る経過	(山下史朗) 1
第2節 発掘調査の経過と体制	(山下) 1
第3節 整理作業の経過と体制	(仁尾一人) 2
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	(池田正男) 3
第2節 歴史的環境	(池田) 3
第3節 篠山城跡の調査	(仁尾) 7
第3章 調査の成果	
第1節 遺構	(山下) 13
第2節 遺物	(岡田章一) 16
第4章 まとめ	
第1節 遺構について	(山下・仁尾) 34
第2節 遺物について	(岡田) 36
篠山城跡に関する報告書一覧	37
本文中の引用・参考文献一覧	38

挿図目次

第1図 遺跡の位置	第2図 篠山郵便局内調査区の位置	1
第3図 篠山城跡の位置と周辺の遺跡	第4図 篠山城跡三の丸跡の調査位置図	5
第5図 篠山城跡三の丸跡 第41次調査 遺構平面図	第6図 調査区南壁土層断面図 および遺構土層断面図	14
第7図 出土遺物(1)	第8図 出土遺物(2)	18
第9図 出土遺物(3)	第10図 出土遺物(4)	19
第11図 出土遺物(5)	第12図 出土遺物(6)	20
第13図 出土遺物(7)	第14図 出土遺物(8)	22
第15図 出土遺物(9)	第16図 「丹州篠山城郭之繪圖」と 調査区の位置	24
		25
		35

表目次

第1表 篠山城跡三の丸跡 発掘調査履歴(1)	第2表 篠山城跡三の丸跡 発掘調査履歴(2)
10	11

第3表 出土遺物観察表(1).....27	第4表 出土遺物観察表(2).....28
第5表 出土遺物観察表(3).....29	第6表 出土遺物観察表(4).....30
第7表 出土遺物観察表(5).....31	第8表 出土遺物観察表(6).....32
第9表 出土遺物観察表(7).....33	

巻首図版目次

巻首図版1 史跡 篠山城跡全景 (南西から) 平成14年7月撮影 調査地遠景 (南から) 平成14年7月撮影
巻首図版2 天保八年「丹州篠山城郭之繪圖」(個人蔵)
巻首図版3 篠山城田三の丸跡 第41次調査 出土遺物 出土遺物 織部焼
巻首図版4 出土遺物 染付(中国模製) 出土遺物 染付(京焼系)
巻首図版5 出土遺物 青磁(王地山焼・三田焼) 出土遺物 陶器(京焼・備前焼)
巻首図版6 出土遺物 施釉陶器(丹波焼) (丹波焼) (瀬戸・美濃焼)

写真図版

写真図版1 調査地遠景(南から) 調査地より篠山城跡を望む(北西から) 調査前状況(南東から)	写真図版2 調査区全景(西から) 調査区全景(北東から) 調査区南壁土層断面(北西から)
写真図版3 SK01(東から) SK02(南から) SD04(西から)	
写真図版4 調査区東半部(南から) 調査区西半部(南から) SK01土層断面(西から) SK05土層断面(北から) SD01土層断面(南から) 調査状況(東から) SK01掘り下げ状況(北東から)	
写真図版5 出土遺物(1)	写真図版6 出土遺物(2)
写真図版7 出土遺物(3)	写真図版8 出土遺物(4)
写真図版9 出土遺物(5)	写真図版10 出土遺物(6)

第1章 調査の経緯と体制

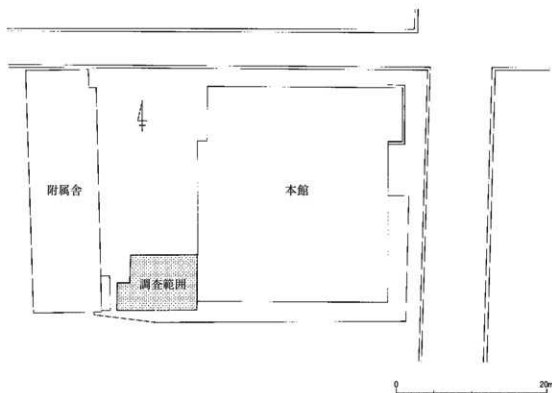
第1節 調査に至る経過

郵政省近畿郵政局（現、日本郵政公社）では、多紀郡篠山町北新町99（現、篠山市北新町99）に所在する篠山郵便局が年末年始の繁忙期に作業スペースが不足し、業務に支障を来すことから、本館と付属舎に挟まれた駐車場の一角に簡易小増築を計画した。

当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「篠山城田三の丸跡」にあたり、篠山城の大手馬出の北側道路に面した場所に位置していることから、代々家老職級の武家屋敷として使用されたものであり、天保年間（1830～1843）の絵図（『丹州篠山城郭之繪圖』）によれば、大目付服部氏の屋敷地であったことがわかっている。このため、兵庫県教育委員会と郵政省近畿郵政局とで対策を協議した。

第2節 発掘調査の経過と体制

調査対象地周辺では、これまで篠山町教育委員会（当時）によって40次にわたる「篠山城田三の丸跡」の発掘調査が行われ、遺構は比較的良好に残存していた。このため、今回も武家屋敷跡の遺構が残存している可能性が高いものと思われ、さらに工事を実施する建物が、簡易増築とはいえ一時的な建物ではなく、恒久的な建築物であることから、対象範囲を発掘調査することとなった。



第2図 篠山郵便局内調査区的位置

調査は、これまで篠山町教育委員会が行ってきた「篠山城田三の丸跡」の調査を引き継ぎ、第41次調査として、平成9年2月17日から2月20日（実働4日間）まで実施した。調査面積は71㎡である。

調査担当者

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第1班 主 査 山下史朗

第3節 整理作業の経過と体制

篠山城田三の丸跡の出土品整理事業は、当初、平成16年度に報告書刊行に至るすべての作業を行う予定であったが、事業者（日本郵政公社）との協議の結果、平成16・17年度の2カ年に分けて実施することとなった。

平成16年度は、現場での調査が短期間であったため、遺物の水洗い作業から開始し、ネーミング、接合・補強、実測・拓本、復元に至る作業を実施した。なお、遺物の水洗いおよびネーミング作業は明石市魚住町に所在する兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の魚住分館において実施した。

整理担当職員

兵庫県教育委員会文化財室 考古博物館開設準備担当

主 査 山下史朗

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

整理保存班 主 任 仁尾一人（工程管理）

整理技術嘱託員 尾鷲都美子・眞子ふさ恵・島村順子・木村淑子・前田千栄子・小野潤子

宮野正子・三好綾子・奥野正子

魚住分館 長谷川洋子・早川亜紀子・伊藤ミネ子

平成17年度は、出土した木製品の保存処理、遺物の写真撮影、遺構図補正、トレース、レイアウト、報告書刊行に至るまでのすべての作業を実施した。また、出土遺物のうち、染付・青磁などの磁器類については、実測図にデジタル写真を貼り合わせるデジタル画像合成処理作業を外部に委託（株式会社文化財サービス）し、実施した。

整理担当職員

兵庫県教育委員会文化財室 考古博物館開設準備室

主 査 山下史朗

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

整理保存班 主 査 仁尾一人（工程管理）

整理技術嘱託員 尾鷲都美子・吉田優子・西口由紀・蔵 幾子・宮野正子・河上智晴

大仁克子・加藤裕美・早川有紀

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

蘆山盆地は、兵庫県東部の、京都府に接する界境に位置する。この盆地は、東西約12km、南北約4kmの長円形をなし、盆地底標高200mの船底状を呈する。地層が褶曲作用を受けて、盆地の中央部を東西に向斜軸が走り、現在加古川の支流、蘆山川が流れている。そして、盆地内を東西方向に白髪岳断層が、南北方向には阿草断層といった断層線が走る構造盆地である。

盆地の周囲を北から時計回りに標高600mから700m級の三岳、小金ヶ嶽、八ヶ尾山、雨石山、櫃ヶ嶽、三因岳、弥十郎ヶ岳、愛宕山、虚空蔵山、白髪岳、金山、黒頭峰、夏栗山、西ヶ嶽等の山々が囲み、かつて盆地底には、中生代白亜紀中期に堆積した蘆山層群によって、淡水の湖が存在した。

この蘆山層群は、盆地中央部に島状に点在する独立丘陵や盆地周縁の丘陵部を構成している。蘆山城は、盆地中央の独立丘陵に築かれている。平野部は東西の高低差が少なく、南北の高低差は大きい。雨水は、大半が蘆山川により、西縁にあたる明野・大滝から川代渓谷を通じ、また南西部の古森・草野から武庫川を通じて排出される。

蘆山盆地には、鼓峠、板坂峠、原山峠、天引峠、天王峠、古坂峠、山越峠、草野坂（日出坂）、三本峠、小峠、鐘ヶ坂峠、瓶割峠（国領峠）、佐中峠、栗柄峠などの峠があり、唯一三田市藍本付近から武庫川沿いの谷底平野をたどる道を除くと、盆地に入るには急峻な峠を登り切らなければならない。

このように天然の要害と言えぬ盆地を囲む高い山と峠、盆地内に点在する独立丘陵等に築いた山城群、盆地南東に位置する天引峠と北西の鐘ヶ坂峠を結ぶ山陰道の存在、そして京都・大阪に近く、また山陰への要衝の地として、歴史の舞台となる必然性をこの蘆山盆地は有している。

第2節 歴史的環境

室町時代、四方を山に囲まれた蘆山は、平野部や深い谷間をもち、京に近いことから、東寺領に属する大山荘などいくつかの荘園があった。丹波守護には幕府の管領であった細川氏が治めていた。蘆山盆地における八上城跡・蘆山城跡を中心として歴史的環境について触れてみたい。

1. 波多野氏と八上城跡

波多野氏は、石見国出身の土豪で、吉見姓を名づけていたが、清秀の時に細川勝元によって母方の姓、波多野氏となった。応仁の乱の戦功によって正元（1259年）の頃、多紀郡小守源代となり、15世紀後半に八上の黒谷に奥谷城を築いた。この奥谷城は、蘆山盆地中央に位置する蘆山城跡の東南、約7.5kmの高城山から西に張り出す尾根の先端部に立地する東西200m、南北200mの小規模な城郭である。最近の八上城に関する城下町の研究によると、八上城と法光寺城に挟まれた谷間地、現在の殿町（旧奥谷）の集落に、この頃の城下町が想定されている。清秀は、永正元（1504）年に死去した。

16世紀には清秀の子元清が、郡規模領主として成長するに従い、永正5（1508）年、奥谷城の背後の高城山に八上城を築城し、旧奥谷城は、八上城の一郭（黒丸）となった。

この八上城跡は、翼状にひろがる山塊・標高462mの高城山山頂及びその周辺に築かれた連郭式山城である。殿町の集落を挟んで標高約340mの法光寺山に築かれた法光寺城を支城とする東西3km、南北

約1.4kmにおよぶ中世山城を構成している。遺構には、郭（本丸・二の丸・三の丸・右衛門丸・中の壇・下の茶屋丸・岡田丸・西南の丸・芥丸・西蔵丸）、石垣、堀切、土塁、井戸、池などがある。

波多野氏は、管領細川氏の有力内衆として活躍し、以後、両細川氏の対立時には、細川高国方に与力して周辺の荘園を蚕食し、国人・土豪を傘下におさめて西丹波一帯に勢力を張った。秀忠は、戦国大名化するのに伴い八上城と城下町を拡大・発展させた。

16世紀中頃には三好長慶や松永久秀と対立して一時八上城を奪われたが、永禄9年（1566）に奪回した。これらの抗争に備えて法光寺山に出城を構えたと推定される。波多野氏は、織田信長が上洛すると服従の姿勢を示したが、のちに毛利方につき、天正4年（1576）に明智光秀を敗走させた。この頃の軍事組織は、最高機関は「御三人衆」大路城主二階堂伊豆守・宮田城主山名和泉守・能勢城主能勢丹波守が可り、この地域で最も強大な土豪である。波多野氏直属の家臣団、旗本の統括は、「老中」と呼ばれる譜代の層によってなされ、平林秀衡・渋谷宗忠・三田綱氏・渋谷氏秀・荒木藤内左衛門・渡辺継俊等6人である。有力土豪を七頭（沢田城主小林重範、久下城主久下重氏、園部城主荒木氏綱など）・七組（曾路城主内藤勝勝、萩野城主萩野朝道、須知城主須知景民など）・先鋒隊（八田城主初井教業、福知城主小野本吉澄など）に組織した。

城下町は、八上城跡の北麓、京街道沿いに、現在の八上上町・八上下町の集落に旗本などの住まいする館を構え、商人の呉服町・魚屋町・鍛冶町や上宿、下宿の宿場も形成されていた。

天正6（1578）年3月、織田信長の部将・明智光秀によって八上城包圍戦が開始された。波多野氏の城として、篠山市内に点在する主な城跡は、田篠山町内一八百里城・奥畑城・飛の山城・淀山城・南山城・東山城・畑山城・東本庄堡・初井城・安口城・柳梨城・細工所城・白藤城、田西紀町一内場山城・三尾城・栗柄城・草山城、田丹南町一大山城・吹城・網掛城・味間南城・大沢城・岩崎城・真南条上城・中山別荘・栗柄野城・波賀野古館がある。一方、明智氏の陣城等は、篠山川の右岸に田篠山町一般若寺城・勝山城・塚ノ山城の3箇所と、篠山市と丹波市の境、鎌ヶ坂峠に位置する田丹南町一金山城がある。八上城は、天正7（1579）年、光秀の兵糧攻めで落城し、波多野氏は滅亡した。

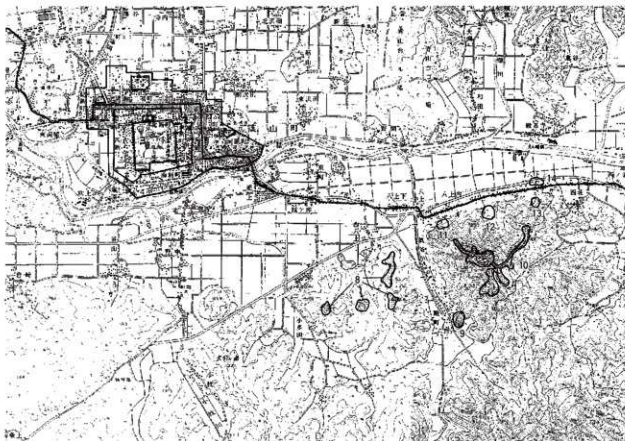
明智光秀が丹波を領有すると、八上城には並河飛騨守が城代として置かれたが、明智氏滅亡後は、羽柴（豊臣）秀勝が亀山（亀岡）に封じられ、その家臣の朝野和泉守・余江長兵衛らが八上城の城番となったと言われている。

その後、かつて豊臣秀吉の5奉行の一人であった前田玄以が八上城主となる。関ヶ原の合戦の際、家康に款を通じたため、領地を安堵された。慶長7（1602）年に病没し、その子茂勝が跡を継いだ。慶長13（1608）年、主膳前田茂勝は、重臣を殺害して八上を出奔し、「狂乱」と記され、所領を没収された。

この時代の遺構として、現在、高城山北西麓に堀跡と推測される水溜まりと土器が残存する。また春日神社から裏手の緩斜面地に「主膳屋敷跡」と呼ばれる平坦地とその奥の一段と高くなったところに「御殿屋敷」という平坦地があり、この一帯が前田玄以・茂勝時代の郭跡と言われている。

慶長13（1608）年8月、常陸国（茨城県）笠間城から家康の實子と言われる松平（松井）康重が、5万石を与えられて入部した。その後、後述する理由のため康重は、新しく城を築く候補地を盆地中央に散在する王地山、笹山、飛ノ山の三つの小山を選び、家康が、笹山に決定した。

要約すると、この城は、①15世紀前半代、波多野清秀が、奥谷中央の熊谷に奥谷城（熊丸）を築城し、本拠地とした時期。②16世紀初頭、波多野元清が、八上城を築城後、秀忠、元秀、秀治の本城とし



- | | |
|----------------|--------------|
| 1. 史跡 篠山城跡 | 8. 法光寺城跡 |
| 2. 篠山城田三の丸跡 | 9. 藤丸城跡 |
| 3. 篠山城大手馬出跡 | 10. 八上城跡 |
| 4. 御下屋敷跡・山内燒窯跡 | 11. 八上城主膳屋敷跡 |
| 5. 篠山城下町 | 12. 菅領寺跡 |
| 6. 王地山陶器所跡 | 13. 八上東陽寺跡 |
| 7. 近世山陰道 | 14. 八上上道跡 |

第3図 篠山城跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

て合戦し、明智光秀により天正7年に落城するまでの時期。③光秀が城代を置き、明智滅亡後豊臣系大名が亀山城に入り、八上城には城番を置き支配した時期。④岡ヶ原の合戦後、主膳屋敷を城郭とする前田玄以・茂勝の時期。⑤松平康重の移封の時期。の5時期に整理することができる。

2. 篠山城

篠山城山は、慶長14(1609)年11月、現在の篠山市北新町(旧丹波国多紀郡日置庄黒岡)に築城された。八上城主、松平康重が、初代城主として入城した。

この城は、徳川幕府が、岡ヶ原の合戦(慶長5(1600)年)後、大坂夏・冬の陣(慶長19(1614)年・元和元(1615)年)に備え、豊臣家を支持する西日本の諸大名を軍事的に押さえ込む、大坂城包圍網の一つの城として築いた。具体的には、この篠山が、京都から山陰・山陽、そして大坂へと通ずる要衝の地であり、大坂城と西日本の諸大名を分断する格好の地であること、譜代大名である松平康重を移封して築城にあたらせると共に外様大名に城普請をさせることで力を削ぐなど、緊迫した時代の極めて

戦略的な意図をもって城普請が行われた。

そこで、慶長14（1609）年3月9日、銀初めを行い、普請総奉行一姫路城主池田輝正、縄張り奉行一津城主藤堂高虎、目付役一譜代大名松平重勝、普請奉行一王虫勝重・石川八左衛門・内藤金左衛門、夫役一山陽・山陰・南海の15ヶ国、20諸侯、約400万石に相当する大名が労役を行う、いわゆる天下普請である。同年9月に竣工し、着工以来200余日でおおよその城郭が完成した。

篠山城の構造と特色について、「日本城郭体系 第12巻 大阪・兵庫」によると、①笹山という小山を利用した平山城である。②縄張りとは典型的な方形で、天守台・天守多聞（殿守丸）・本丸は梯郭式、それを囲む二の丸、三の丸は輪郭式である。③東北線上の鬼門にあたる方向は、石垣・濠共に屈曲している。④天守台は、単層の隅櫓と土塼だけで、最初から天守を築いていない。⑤天守台・天守多聞・本丸は、高石垣で囲まれている。⑥天守台・天守多聞・本丸の幅は、内濠との間に犬走りの施設を伴っている。⑦本丸の表門は、廊下門を伴った櫓門で、その内側は二重の外柵形である。⑧本丸の裏門は、堀門形式であり、帯郭のような長方形の外柵形で、南の廊下門に続いている。⑨二の丸は、広大な濠と土塼で囲まれ、土塼の上は、すべて屏風折れの土塼である。⑩二の丸の大手（北）・東・南の三門は、土橋で濠を渡り、角馬出の施設を伴い、特に南馬出は土塼である。と記している。

しかし、城の完成はなお1年以上、城下町の完成まで40年を費やすこととなる。城の候補地の1つである東に位置する王地山には、松平（藤井）氏時代に本経寺と稲荷神社を祀り、西に位置する飛ノ山の麓には、歴代城主の菩提所を設け、墓所、蟠竜庵を造り、城を守る聖域とした。慶長15（1610）年、八上城下から町屋を新城下に引越し、次に南北に流れる黒岡川を改修して南新町付近から西にL字状に屈折させ、南の篠山川と並行して東西に流し、二重の防衛線とした。城下町に入る東の道は、西の壱、八上内、八上下、樺ヶ坪、西からの道は、大野、郡家において、見通しを防ぐため屈曲させている。城下町は、城郭を中核として、碁盤目状に整然と仕切り、防衛のために道幅は2間ないし4間程度とし、町の出入り口には、番所を設け、道路は遠見遮断のための丁字交差、喰い違い交差、鍵形屈折を行っている。町の外郭地点の要所には防衛上の考慮から真福寺・観音寺・尊宝寺・来迎寺・誓願寺・妙福寺などの寺院が配置され、町全体を城塞化している。

武士の居住地として旧二の丸に、上級の侍屋敷、旧三の丸には、中級の侍屋敷が配置され、さらに濠外の上・中・下小姓町・御徒町・西町・乾新町等には中・下級の屋敷があり、町屋は城の北西から北側・東側へ、現在、魚屋町・二階町・呉服町・立町・河原町があり、裏町はない。屋敷割は、京型屋敷割をとる短冊型町割である。

次に城内の様子を、幕末の城郭絵図を見ると、外濠の間隔は、約4町四方、現存する濠は、北濠・東濠・南濠・西濠、及び東・南馬出を囲む二つの濠であるが、東濠・南濠はかつて一つの濠（東濠）であったが、東濠の貯水量を増やすため、昭和2（1927）年、両濠を区切る堤防を築いた。

馬出は、北（大手）、東、南の三箇所に角馬出があり、外濠の虎口の外郭に、凹字形の濠と土塼で囲まれていた。北馬出は、明治31（1898）年に篠山町役場に、大正12（1923）年に濠は埋められ、一部土塼が保存されている。昭和54（1979）年、この場所に篠山裁判所の移転計画がもちあがり、予察調査が実施された。その結果、馬出遺構が確認されたため、永久保存された。東馬出は、濠と石垣だけが残り、南馬出だけは土塼と濠が完全に残っている。

次に旧二の丸、外濠の内側には水際から石垣を積み上げ、その上に土塼を築き、屏風折れの高土塼を築いた。四隅には角櫓がそびえていた。

3箇所の虎口、大手門、東門、南門の三城門があり、「三御門」と称した。いずれも二の丸を囲む土塁の間に設けられた堅固な櫓門であった。

東門を入ると、「中老屋敷」「權役所」「対面所」「在藩長屋」等が並び、更にその西に、大手門、そして太鼓櫓があり、太鼓櫓の西には空地があり、必要の場合、藩士の集合所となっていた。続いて旧篠山中学校跡地の西側一帯には、北から吉原、蜂須賀、青山、堀内、石橋などという家老の邸宅があり、又、城内の東側、篠山幼稚園付近には米倉が立ち並び、篠山小学校には吉原、青山などの家老や御香頭の邸宅、そして南の端には石段があり、そこから西一帯は、内馬場及び練兵場、また南門を入った右には郡代佐治の邸宅があった。

旧本丸は、三方を内濠から立ち上がる高石垣で圍繞し、石垣の上には多間櫓、四隅には多重の隅櫓が囲む。表虎口は、廊下門に続いて左右の石垣の間を櫓門で固め、そこに入った枳形内には、さらに中門と鐵門（櫓門）、南の門には、左右の石垣にかけた渡櫓の下が埋門となり、その外には隅櫓があり、旧二の丸の南廊下門があった。旧本丸内には、大書院の東に小書院、西に大広間が続き、南に台所や諸役人の詰所、さらに奥には城主の居館や奥御殿があり、その南に庭園があった。

天守丸は、三方を内濠と高石垣で圍繞し、石垣の上には多間櫓、三隅には多重の隅櫓が囲む。東南の一角に一段高く天守台が築かれ、土塼があり、隅櫓が建っていた。天守閣は築かれていない。

篠山藩歴代の藩主は、1. 松平（松井）康重（1609年） 2. 松平（藤井）信吉（1619年） 3. 松平（藤井）忠国（1620年） 4. 松平（形原）康信（1649年） 5. 松平典信（1669年） 6. 松平信利（1673年） 7. 松平信庸（1677年） 8. 松平信亨（1717年） 9. 青山忠朝（1748年） 10. 青山忠高（1760年） 11. 青山忠講（1781年） 12. 青山忠裕（1785年） 13. 青山忠良（1835年） 14. 青山忠敏（1862年）である。明治維新まで260年間、松平3氏8代、青山氏6代の藩主が、徳川譜代の名家として、領内の治世にあたる一方、京都所司代、大阪城代、江戸老中を務めた。石高は、当初5万石であったが、老中を務めた12代青山忠裕が、多年の功により文政10（1823）年、1万石を加増され、廃藩まで6万石であった。

大政奉還後、天皇を頂点とした中央集権国家の樹立が図られ、篠山藩では、明治2（1869）年2月17日、版籍奉還されると、藩主である青山忠敏が篠山藩知事となった。城郭は全て朝廷の所有となり、兵部省の管理するところとなった。

3. 明治維新後の篠山城跡

明治4（1871）年7月14日、廃藩置県により、篠山藩を廃して、篠山県を置いた。明治6（1873）年1月14日陸軍省、財務省から所謂「廢城令」（城郭取払令）が出され、太政官布達によって「廢城」となった。その後、旧二の丸の土塁、水際石垣は削られ、取り外され、川の石垣などに転用された。門、多間櫓、隅櫓などの建造物は、取り壊され寺院の山門、民家の部材や屋根瓦などに再利用された。

第3節 篠山城跡の調査

篠山城は、明治の維新期に廢城となり、建築物の大部分は取り壊されたが、城郭構造の基盤である石垣や外濠、馬出などの遺構はほぼその原形を残していたことから、昭和31（1956）年、国の史跡に指定された。

築城から約30年後の正保年間（1644～1648）に描かれた「丹波国篠山城絵図」や「丹波篠山城之絵図」

は、築城当時の状況を描いたものとして篠山城の基礎資料となっているが、それらの絵図には現在、二の丸と呼ばれている部分は本丸、現在の本丸部分は殿守丸とそれぞれ明記されている。江戸時代中期以後の絵図は、そのほとんどが幕府に石垣の修復を願いつた時に描かれたもので、その中で最も古い享保3(1718)年の「丹波国篠山城絵図」では、本丸以下、現在呼称されている遺跡の名称に変わっている。昭和31年の史跡指定以後、篠山町教育委員会(当時)以下、篠山市教育委員会に統一)によって4次にわたる総合整備計画が策定され、史跡の整備・活用が進められているが、篠山城跡の調査は、天守台・本丸(殿守丸)・二の丸(旧本丸)など濠に囲まれた史跡内(以下、史跡篠山城跡)と現在、市街化されている濠の外側に配された中級武家屋敷跡があった旧三の丸(以下、篠山城旧三の丸跡)に分けて実施されており、遺跡の名称は築城当時の旧名が使用されている。

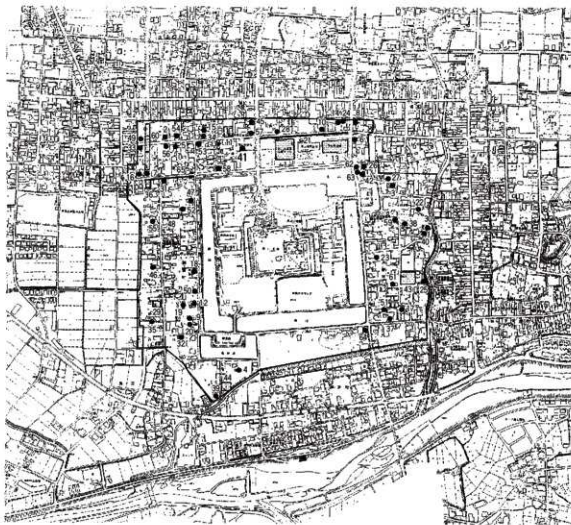
篠山城跡の埋蔵文化財の調査は、「史跡篠山城跡」の調査が昭和50年代より、「篠山城旧三の丸跡」の調査が昭和60年代よりそれぞれ実施されている。また、埋蔵文化財の調査に先立ち、史跡内の石垣修理が昭和40年代より進められ、平成10年度までに15箇所の保存修理が行われている。ここでは、発掘調査によって明らかとなった史跡篠山城跡と旧三の丸跡について記載していきたい。

1. 史跡篠山城跡の調査について

史跡篠山城跡の調査は、昭和42年の二の丸北東石垣の保存修理に始まり、昭和56年から平成6年度末までに22次におよぶ発掘調査が実施されている。築城当時、本丸と呼ばれていた現在の二の丸跡は、登り口を含めた総面積が約1万㎡と広く、多門櫓と隅櫓が周囲を巡り、北正面の中央には大書院が配置されていた。大書院は、慶長14(1609)年の築城時に建てられたと考えられる江戸時代初期の大規模な書院造の建築様式を残す建造物であったが、昭和19(1944)年1月6日夜、不慮の火災によって焼失した。昭和50年代中頃まで石垣の保存修理を中心に進められてきた篠山城跡の整備は、二の丸跡内の建築遺構を検出し、新たな整備計画を立案することを目的に昭和56年、大書院跡一帯1,625㎡の発掘調査が実施された(「史跡篠山城跡」第2次調査 以下同)。その後、昭和57年に小書院跡および台所跡など1,200㎡(第3次調査)、昭和58年には玄關棟跡および台所跡の南側に続く奥御殿跡の1,800㎡(第4次調査)、昭和59年には南側の塀跡、奥御殿跡および庭園の一部など1,200㎡(第5次調査)の調査が順次行われ、あわせて約6,000㎡におよぶ範囲の発掘調査が行われた。

大書院跡の調査では、全体的に礎石の残りが悪かったものの、残存する礎石と検出された礎石の抜き取り跡が江戸中期頃の間取古図^①にみられる平面と一致することが確認され、周囲を巡る雨落溝も検出された。大書院に続く御殿跡の調査では、間取古図にみられない江戸時代前期の雨落溝や塀の跡が検出され、築城から近い時期に立て直されたことが明らかになるなどの成果がえられた。また、台所跡の調査では、かまど跡やその痕跡と考えられる焼土が検出され、御殿内で使用された陶磁器類などが多数出土している。この他、庭園の調査では江戸時代の地表面が比較的良好に残っており、銅製の煙管が多数出土し、文久2(1862)年に新築されたと考えられる御居間跡の調査では岩盤を掘り込んだ便所跡も確認されている。これらの調査からは、大書院が公的な式典等に使用された建物であるのに対し、御殿部分は藩主が日常生活を送っていたことを裏付ける遺構・遺物が発見される貴重な成果がえられた。

なお、大書院については、古絵図・発掘調査の成果・建物内外を撮影した古写真などに基づいた建物復元の設計と建築が行われ、平成12(2000)年3月に工事は完成し、現在は篠山城史料館を併設した市民憩いの場として、広く一般に開放されている。



第4図 篠山城旧三の丸跡の調査位置図

2. 篠山城旧三の丸跡の調査について

篠山城旧三の丸跡の調査は、昭和61年より始まり、平成16年度末までに65次におよぶ発掘調査が実施されている（第1・2表）。調査地点は、外濠の周囲に点在しており、本書で報告する調査は大手（道手）馬出跡に隣接する地点に位置し、第41次調査である。65次におよぶ調査では、今回の調査を含め個人住宅等の建設に伴う数㎡から100㎡以下の限られた面積の調査が大半を占め、200㎡を超える比較的大規模な調査はわずかに10例である。

昭和61年に実施された大手馬出跡東側に位置する2,700㎡の調査（「篠山城旧三の丸跡」第1次調査、以下同）では、屋敷の区画を示す境界溝の他、礎石の一部、土坑、埋桶、井戸、池跡などが検出された。遺構は、天保8（1837）年の「丹州篠山城郭之繪圖」（巻首図版2 以下、繪圖と記載）に描かれた屋敷割の状況とはほぼ一致しており、江戸時代後期の屋敷配置の復元を可能にする調査成果となった。西濠北西隅より西へ約130mの地点の調査（第7次調査）では、南向きの間口7間、奥行5間の長方形の建物跡が検出された。礎石の大部分は残存し、礎石の抜き取り跡も確認されるなど遺構の残存状態は良好で、武家屋敷主屋の柱位置と部屋割が復元可能な成果をえた。第1次調査区の東、北濠北側に位置する1,850㎡の調査（第13次調査）では、7区画の屋敷跡や境界溝、埋桶、井戸などが検出され、屋敷跡か

第1表 福山城旧三の丸跡 発掘調査履歴(1)

調査次	調査地	調査年度	事業内容	調査面積	調査成果	出土遺物	報告書	
第1次	北新町41	昭和61年度	たんば田園交響ホール	2,700㎡	武家屋敷地界溝、堀、井戸	肥前系陶器、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、丹波焼、王地山焼	報告書1	
第2次	北新町76-1	昭和63年度	賃貸マンション	35㎡	堀橋、土坑	肥前系陶器、肥前系染付、丹波焼	報告書2	
第3次	東新町1		丹波杜氏記念館	70㎡	屋敷地界溝	肥前系陶器、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、織部焼、王地山焼	報告書2	
第4次	西新町1-2-5	平成元年度	土壌改良	165㎡	築城時の旧三の丸盛土整理層	肥前系染付、丹波焼、王地山焼	報告書2	
第5次	北新町67-2		旅館改築	150㎡	堀橋、土坑、溝	肥前系染付、瀬戸・美濃系陶器、王地山焼	報告書2	
第6次	北新町121-1		店舗	150㎡	石敷遺構、埋栗、土坑	肥前系陶器、肥前系染付、丹波焼	報告書2	
第7次	北新町60		個人住宅	192㎡	武家屋敷主屋跡礎石	肥前系陶器、肥前系染付、丹波焼	報告書2	
第8次	北新町119		事務所	100㎡	石組、溝、土坑	肥前系染付、京焼系陶器、丹波焼、王地山焼	報告書2	
第9次	西新町24		個人住宅	54㎡	埋栗	肥前系染付、京焼系陶器、丹波焼、王地山焼	報告書2	
第10次	北新町110-3		個人住宅	49㎡	素掘溝、埋栗、土坑	肥前系染付、丹波焼、王地山焼	報告書2	
第11次	北新町88-5		平成2年度	福山町新庁舎建設代 替地提供	500㎡	江戸前期礎石建物1 棟、埋栗、井戸	肥前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、織部焼、志野焼、漆喰	報告書3
第12次	西新町26-4			個人住宅	67㎡	土坑	肥前系染付、丹波焼、王地山焼	報告書2
第13次	北新町41他		平成3年度	福山町新庁舎	1,850㎡	武家屋敷地界溝、井戸、埋栗	肥前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、京焼、瓶平焼、丹波焼、王地山焼	報告書3
第14次	北新町117	福山町新庁舎建設移 転基礎		82㎡	武家屋敷主屋火災 崩、土坑	肥前系染付、丹波焼	報告書3	
第15次	北新町81	個人住宅		28㎡	溝状遺構	江戸末期磁器	報告書2	
第16次	北新町61	個人住宅		81㎡	埋栗、土坑	肥前系染付、丹波焼	報告書4	
第17次	東新町29	個人住宅		12㎡	落ち込み状遺構	肥前系磁器、丹波焼、王地山焼	報告書4	
第18次	西新町31-3	個人住宅		9㎡	整地地盤	遺物なし	報告書4	
第19次	西新町26-2	個人住宅		53㎡	土坑	肥前系磁器、丹波焼、王地山焼	報告書4	
第20次	西新町25	開発計画調整		65㎡	土坑	肥前系陶器、肥前系磁器、丹波焼、王地山焼	報告書4	
第21次	北新町41	道路拡幅		400㎡	上小姓町屋敷跡、 堀、井戸、堀橋、境 界溝	肥前系陶器、織部焼、志野焼、陶磁器片	報告書4	
第22次	東新町84-7	平成4年度		個人住宅(増築)	5㎡	遺構なし	陶磁器片	報告書4
第23次	東新町6		個人住宅	14㎡	遺構なし	陶磁器片	報告書4	
第24次	北新町11		個人住宅(増築)	6㎡	遺構なし	陶磁器片	報告書4	
第25次	東新町179		個人住宅	20.5㎡	埋栗	肥前系磁器、丹波焼、瓦	報告書4	
第26次	北新町39-5		生活調練施設	24㎡	溝状遺構	陶磁器片	報告書4	
第27次	東新町1-5		多紀郡広域行政事務 組合事務所増築工事	62㎡	油跡、土坑、井戸、 溝	肥前系染付、瀬戸・美濃系陶器、丹波焼、王地山焼、煙管	報告書12	
第28次	北新町41	平成5年度	福山町コミュニティー 防衛センター	40㎡	油跡、堀橋、瓦列	肥前系陶器、肥前系染付、瀬戸・美濃系陶器、京焼系陶器、丹波焼、王地山焼、漆器類	報告書5	
第29次	西新町95		武家屋敷安間家史料 箱建物復元整備	193㎡	主屋跡	肥前系磁器、丹波焼	報告書12	
第30次	東新町63	平成7年度	個人住宅(増築)	4㎡	遺構なし	肥前系磁器、丹波焼、王地山焼	報告書12	
第31次	西新町51		個人住宅	30㎡	井戸、土坑	肥前系陶器、肥前系磁器、京焼系陶器、丹波焼、王地山焼	報告書6	
第32次	西新町19		個人住宅	3㎡	柱穴	瓦	報告書6	

第2表 福山城旧三の丸跡 発掘調査履歴(2)

調査次	調査地	調査年度	事業内容	調査面積	調査成果	出土遺物	報告書	
第33次	北新町71-1・3	平成8年度	個人住宅	25㎡	埋桶	遺物なし	報告書12	
第34次	北新町81		個人住宅	24㎡	盛土整地層	肥前系陶器、肥前系染付、丹波焼	報告書12	
第35次	西新町103-2		事務所	14㎡	土造伏高まり	陶磁器片、瓦	報告書12	
第36次	西新町52-2		都市計画道路城西線	342㎡	屋敷跡、土坑、埋桶、溝、井戸	肥前系磁器、肥前系染付、丹波焼、王地山焼、火箸、簀	報告書12	
第37次	東新町25		個人住宅	16㎡	遺構なし	肥前系陶器、肥前系磁器、丹波焼、王地山焼	報告書12	
第38次	東新町68-2		個人住宅	21㎡	土坑	肥前系磁器、丹波焼	報告書12	
第39次	西新町5-2		個人住宅	42㎡	竈跡、土坑、溝状遺構	瓦	報告書12	
第40次	東新町63		個人住宅	93㎡	武家屋敷主屋跡、土坑	肥前系磁器、丹波焼、王地山焼、窯道具	報告書12	
第41次	北新町99-1		孫山郵便局庁舎開拓小増築工事	71㎡	土坑、溝	肥前系陶器、肥前系磁器、福部焼、京焼系陶器、備前焼、丹波焼、王地山焼、窯道具	本書	
第42次	北新町39-14		平成9年度	個人住宅	27㎡	土坑	肥前系染付、丹波焼、王地山焼	報告書12
第43次	東新町35・36・43・46・48・50・52・54	建売住宅		281㎡	武家屋敷主屋跡、土坑、埋桶、溝、水溜遺構、火災跡	肥前系磁器、丹波焼、王地山焼、瓦	報告書7	
第44次	西新町4	集合住宅		335㎡	漆跡	陶磁器片	報告書12	
第45次	北新町95-2	店舗併用住宅		21㎡	土坑、埋桶、瓦列遺構	肥前系染付、丹波焼	報告書12	
第46次	西新町83-2	個人住宅(増築)		10㎡	土坑	丹波焼、陶磁器片	報告書12	
第47次	西新町41-1	個人住宅		42㎡	土坑	京焼系陶器、丹波焼	報告書8	
第48次	西新町64-1・4-6	車庫および倉庫		192㎡	土坑、石敷遺構	肥前系磁器、丹波焼	報告書9	
第49次	北新町72-2	個人住宅		14㎡	武家屋敷整地層、弥生時代後期の土坑	肥前系陶器、丹波焼、弥生土器	報告書8	
第50次	西新町28-3	個人住宅		35㎡	柱穴、土坑	肥前系磁器、丹波焼、王地山焼	報告書8	
第51次	東新町12-2	個人住宅		10㎡	武家屋敷整地層	肥前系磁器、京焼系陶器、丹波焼、王地山焼	報告書8	
第52次	西新町40-5	平成10年度	個人住宅	16㎡	武家屋敷整地層	丹波焼、王地山焼	報告書8	
第53次	北新町84-17		個人住宅	27㎡	武家屋敷整地層、土坑、瓦囲い遺構	肥前系磁器、丹波焼、瓦	報告書8	
第54次	北新町77-1		個人住宅	23㎡	土坑	肥前系磁器、丹波焼、王地山焼	報告書8	
第55次	西新町67-1		個人住宅	29㎡	土坑、溝状遺構	肥前系磁器、京焼系陶器、丹波焼	報告書8	
第56次	北新町68-3		個人住宅	33㎡	武家屋敷整地層、埋桶、土坑	肥前系磁器、京焼系陶器、丹波焼、古墳時代須恵器	報告書8	
第57次	北新町88-1		孫山市役所西庁舎跡地開発	398㎡	池跡、土坑、埋桶、杖列	肥前系陶器、志野焼、京焼系陶器、丹波焼、王地山焼、木製品	報告書12	
第58次	北新町48		個人住宅	8㎡	遺構なし	遺物なし	報告書12	
第59次	東新町59		個人住宅	8㎡	土坑	陶磁器片、瓦	報告書12	
第60次	北新町60・70-1・71-2・73-2・74-2		平成13年度	都市計画道路城西線	1,410㎡	土坑、埋桶、溝、溝状遺構、柱穴	肥前系磁器、丹波焼、古墳時代須恵器、弥生土器	報告書10
第61次	東新町47-1他			個人住宅	8㎡	遺構なし	遺物なし	報告書12
第62次	北新町39他	道路交差点改良工事	22㎡	柱穴	遺物なし	報告書12		
第63次	北新町39他	平成14年度	市道中央線・城東線交差点改良工事	9㎡	江戸時代整地層、溝状遺構	遺物なし	報告書12	
第64次	南新町16-8	平成15年度	個人住宅	8㎡	遺構なし	遺物なし	報告書11	
第65次	西新町地内	平成16年度	電線地中化工事	357㎡	土坑	肥前系磁器、丹波焼、王地山焼、瓦	報告書12	

らは「星ノ」および「フクハラ」と記された江戸時代末期の焼かれた磁器片が出土した。「星野」および「福原」は、輪圖に記載されている居住者を裏付ける資料であり、屋敷を区画する境界溝は変更された敷路が認められないため、江戸時代前期の屋敷割が廃藩時まで存続していたと考えられる結果となった。また、第1次調査区および第13次調査区の北側、町道拡幅部分の延長約250m、400mの調査（第21次調査）では、上小姓町の11区画の屋敷跡の道路に面した塚跡や土坑、埋桶、井戸などが検出され、旧三の丸跡の北西部を南北に走行する都市計画道路城西線に伴う調査（第60次調査）では、明治時代以降の削平によって、屋敷跡に関する遺構の残存状況はよくなかったが、6世紀頃と考えられる遺構や遺物包含層が確認され、周辺に古墳時代の遺跡が存在していたことが明らかとなった。

この他、篠山藩第3代藩主、松平忠国³³⁾によって篠山城の北方、黒岡村山内の丘と称された場所に庭園を始め、樓閣建物、茶園などを有して造られた別邸跡である御下屋敷跡の調査や、篠山城の東方、王地山の麓に文政年間（1818～1830）、藩直営の磁器窯として創業された王地山陶器所跡の調査なども実施されており、城下町を含めた当時の篠山城周辺の状況が明らかになりつつある。

註

- (1) 築城時の文獻・絵圖には「篁」あるいは「葦」の字が混用してみられるが、ここでは現在使用されている「篠山」に統一した。
- (2) 二の丸に所在した城主居館の状況を伝える間取古図（御殿間取図）は、御殿全体の状況を伝える図面が4種類、奥御殿の状況のみを伝える図面が2種類のあわせて6種類が伝えられている。
『史跡篠山城跡』—二の丸発掘調査報告書— 篠山町教育委員会 平成7（1995）年
- (3) 元和6（1620）年、文松平信吉の死去によって藩主となり、慶安2（1649）年、明石へ転封となった篠山藩第3代藩主。

参考文献

- 中山正二 『篠山史談』 昭和6（1931）年
 朽木史郎 『篠山城』 昭和31（1956）年 篠山町役場
 多紀郷友会 『郷友 篠山築城350年記念号』 昭和34（1959）年 多紀郷友会
 嵐 瑞徴 『丹波篠山の城と城下町』 昭和35（1960）年
 村川行弘・橋本久 『篠山城大手馬出跡』 昭和55（1980）年 篠山町教育委員会
 『日本城郭体系 第12巻 大坂・兵庫』 昭和56（1981）年 新人物往來社
 『史跡篠山城跡整備基本構想』 平成11（1999）年 篠山町教育委員会
 『国指定史跡篠山城跡大書院復元工事竣工記念誌 20世紀から21世紀へのおくりもの』 平成12（2000）年 篠山市
 『八上城法光寺城跡調査報告書』 平成15（2003）年 篠山市教育委員会
 田中眞吾 「地形をよむ 兵庫の自然地理 14・15・16 篠山盆地 上・中・下」 『神戸新聞』 平成16年11月24日・12月22日・平成17年1月26日の記事より

報告書（第1・2表記載）

本文末の篠山城に関する報告書一覧（37p）に掲載

第3章 調査の成果

第1節 遺 構

調査対象地は、郵便局の駐車場として使用されていたために、大型トラックの重量にも耐えられるよう、厚さ15cmのコンクリートで舗装され、その下は厚さ15cmの砕石で固められていた。このため、発掘に際しては、まず対象範囲のコンクリートをカッターで切断し、バックホーでこれらを除去した。砕石の下には部分的に厚さ10cmの整地層があり、その下に厚さ15~20cmの旧表土層と思われる灰褐色の地層が確認されたため、この層までを機械により除去した。

旧表土層の直下が粘土質の砂礫からなる地山層であり、土石流タイプの扇状地形を形成している篠山城北側一帯を覆う基盤層である。この層の上面に遺構が残存しており、人力により遺構を検出した。

遺構は、調査区の全域から土坑あるいは溝が検出されたが、調査区東端および西端中央部は視乱によって遺構は一部削平されていた。以下に検出された遺構について、記載する。

1. 土 坑

SK01 調査区の東端部でみつかった方形の土坑である。一部が調査範囲外に及んでいるために東西の長さは不明だが、南北の長さは2.4mで、ほぼ正方形と予想される。土坑自体の深さは遺構検出面から約1.1mであるが、角の部分が遺構検出面から深さ40cm以下では円く掘り残されているため、底の部分の平面形は隅円方形となっている。土坑の底は平らである。土坑の上層部は陶磁器や瓦とともに土砂で人工的に埋められており、底近くでは板などの木製品がまぎって出土している。今回の調査で出土した遺物の約6割はこの遺構から出土している。遺構の掘削深度があまり深くなく、粘土層までで掘削が止まっているので井戸とは考えにくい。遺構の性格は明らかでない。

SK02 後述する浅い落ち込み状の溝であるSD04が埋まった後に掘り込まれた、一辺約70cm、遺構検出面からの深さ約28cmの方形の浅い土坑である。内部には埋土とともに王地山境などの陶磁器が廃棄されていた。今回の調査範囲では、SK01とともに遺物が集中して出土した遺構であるが、遺物の整理作業の結果、SK01の出土遺物と同一個体の資料が数点確認されていることから、2つの土坑が同時に廃棄され、埋められたことが確実である。ただ、SK01とは異なり、遺構の形状に特別な用途が見いだせないことから、ゴミ穴として掘削された可能性が高いものと思われる。

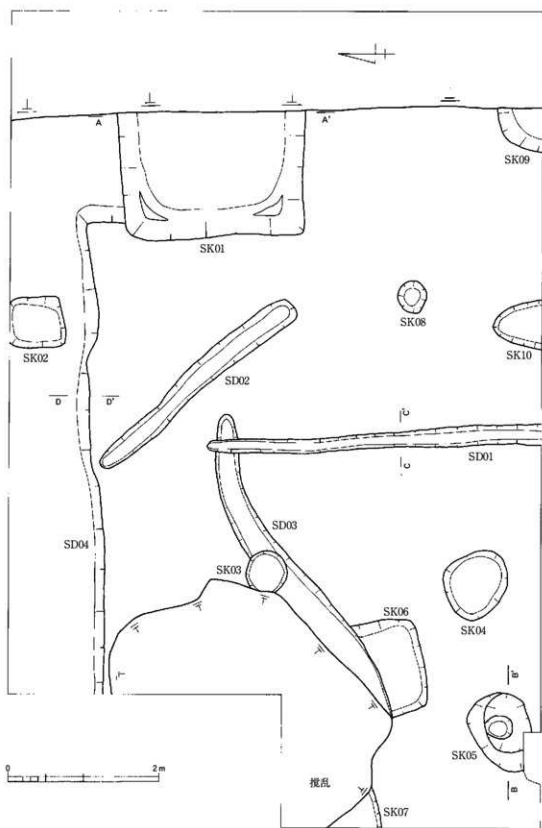
SK03 直径約55cm、深さ約20cmのほぼ円形の土坑である。後述するSD03を切っている。遺物は出土していない。

SK04 直径80~90cmの不整形な土坑である。深さは数cmと浅く、底は平である。遺物は出土していない。

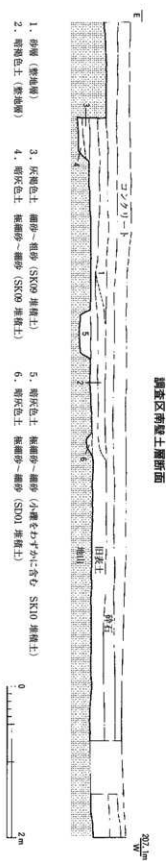
SK05 東西1.1m、南北0.8m、深さ28cmの平面楕円形の土坑である。坑底は何段階かで掘られた不整形な形をしている。遺物は出土していない。

SK06 一辺約1.3m、深さ約15cmの方形の土坑である。攪乱坑により切られているが、後述するSD03よりは新しい遺構である可能性が高い。遺物は出土していない。

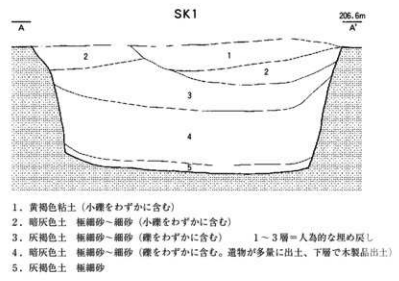
SK07 深さ約10cmの土坑もしくは溝である。攪乱坑によって切られているため全容は不明である。遺物は出土していない。



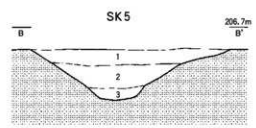
第5図 篠山城旧三の丸跡 第41次調査 遺構平面図



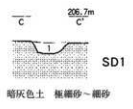
1. 砂層 (砂混層)
2. 暗灰色土 (黄砂混層)
3. 灰褐色土 細砂～粗砂 (SK9 堆積土)
4. 暗灰色土 極細砂～細砂 (SK9 系積土)
5. 暗灰色土 極細砂～細砂 (小礫をわずかに含む SK10 堆積土)
6. 暗灰色土 極細砂～細砂 (SD1 系積土)



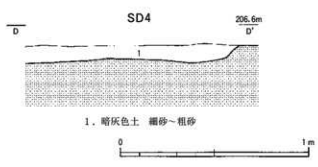
1. 黄褐色粘土 (小礫をわずかに含む)
2. 暗灰色土 極細砂～細砂 (小礫をわずかに含む)
3. 灰褐色土 極細砂～細砂 (礫をわずかに含む) 1～3層=人為的な堆積層
4. 暗灰色土 極細砂～細砂 (礫をわずかに含む。遺物が多量に出土、下層で本製品出土)
5. 灰褐色土 極細砂



1. 暗灰色土 細砂～粗砂
2. 暗灰色土 細砂～粗砂 (黄褐色粘土および礫を含む)
3. 灰色土 極細砂～細砂



1. 暗灰色土 極細砂～細砂



1. 暗灰色土 細砂～粗砂

第6図 調査区南壁土層断面図および遺構土層断面図

SK08 直径40cm、深さ約10cmのビット状の土坑である。遺物は出土していない。

SK09 調査区南東隅でみつかった土坑である。深さは10数cmであるが、全体の形状は不明である。遺物は出土していない。

SK10 幅60cm、深さ15cmの溝状の細長い土坑である。長さは1m以上あるようだが、調査区外に続くため全容は不明である。遺物は出土していない。

2. 溝

SD01 幅25cm、残存する深さわずか数cmの断面U字形の溝である。溝底は北側に向かって数cm程度ゆるやかに下がっている。遺物は出土していない。武家屋敷の区画方向と一致しており、屋敷内を区画する溝であろうか。

SD02 武家屋敷の区画とは異なり、北西から南東方向に延びる溝である。残存部の幅は30~40cm、深さは数cm~10cmと浅く、溝底のレベルも一定ではない。近代以降の掘り溝と考えられる。

SD03 調査区中央部付近で確認された溝である。東北東から西南西方向に延びているが、掘り坑に切られているためその先は不明である。最大幅40cm、深さは15cmで、西に向かって溝底が下がっている。遺物は出土していない。

SD04 調査区の北端部で10cm程度地面が深くなった場所がある。掘方はほぼ屋敷割りの軸線である東西方向と一致し、東部で直角に南側に屈曲する。遺構の底もほぼ平らである。田表土までを含めても、元の深さは最大でも30cmまでに収まる。また、遺物はほとんど出土しておらず、埋土も自然に埋積した状態を示している。遺構検出面自体は、南から北へ10cmほど低くなってゆるやかに傾斜しており、地面に降った雨は、この遺構に流れ込むことになるため、浅く幅の広い溝、もしくは池泉の可能性がある。

第2節 遺物

1. 土器・陶磁器

篠山城から出土した土器・陶磁器には種別では、土師器、無軸陶器、施軸陶器、白磁、青磁、染付磁器、色絵磁器がある。

土師器

24は土師器の焙烙である。型作り成形で、底部は平底で、体部は短く直立する。19世紀前半代に比定される。

無軸陶器

無軸陶器には壺(2)、水鉢(1)、植木鉢(4)、漏斗(27)、急須(36)、盤(34)がある。壺(2)は器面に葛草文を貼り付ける。丹波焼で19世紀前半代の時期が考えられる。水鉢(1)は頸部がほぼ直立し、頸部に型作りの菊花文を貼り付けるもので、丹波焼で19世紀前半に比定される。植木鉢(4)は体部が直線的に斜め上方に延び、体部外面に草花文を貼り付ける。丹波焼で19世紀前半以降のものである。(27)は体部は内響気味に斜め上方に延び、内面に灰軸を施す。丹波焼の漏斗と考えられる。急須(36)は全体に器壁は薄く、外面に赤土部を塗布し、器面は光沢をもつ。備前焼の朱泥の急須で19世紀前半代のもので考えられる。盤(34)は平底で、体部は短く直立する。体部外面には、櫛掻きの波状文を施文する。備前焼の製品で、17世紀前半のものと考えられる。

施軸陶器

施軸陶器には器種別では、碗（7～9）、蓋（6・39）、鉢（10・30）、向付（68）、摺鉢（5）、水鉢（3）、植木鉢（11）、甕（28・29・31～33）、徳利（25・26・35）、土瓶（37・39）がある

碗 7は手びねり成形で、内外面とも灰軸施軸の後、白濁軸を施軸する。底部外面に「三ツケ」の銘をへつ彫りする。丹波焼で京焼系の楽焼写しと考えられる。8は器高が低く、内外面とも透明軸を施軸する。9は器壁は全体に厚く、高台は兎巾状に削りだす。肥前系の可能性が考えられる。

蓋 6は壺蓋である。円盤状で、上面中央につまみを貼り付け、外面に灰軸を施軸する。丹波焼と考えられる。38は土瓶（39）の蓋である。山笠形で、宝珠形のつまみをもつ。外面に白化粧したのち、透明軸を施軸し、鉄軸あるいは呉須で草花文を施文する。京焼系で19世紀前半に比定される。

鉢 10は内面に透明軸、外面には透明軸、灰軸の2軸を掛け分ける。胎土から、瀬戸・美濃系と考えられる。30は口縁部から体部外面に鉄軸を施軸する丹波焼の鉢で近代以降のものと考えられる。

向付 68は型作り成形で内面に布目圧痕が残る。内面に鉄軸で草花文、外面に鉄軸を施軸し、内外面とも、さらに、緑軸を施軸する。美濃系織部焼向付で17世紀前半代に比定される。

摺鉢 5は口縁部内面から体部外面にかけて鉄軸を施軸する摺鉢である。近代以降の丹波焼と考えられる。

水鉢 3は把手を持ち、外面に鉄軸あるいは灰軸を施軸する。丹波焼で19世紀前半代に比定される。

植木鉢 11は獣面状の脚を持ち、内面に赤土部、体部外面に灰軸を施す。丹波焼で19世紀前半代に比定される。

甕 甕には、外面に型作りの草花文を貼り付けるもの（28）、菊花文を貼り付けるもの（29）、外面に柄杓で灰軸を船状に施軸するもの（31・32）、体部外面の上方に凹線を施文するもの（33）がある。いずれも丹波焼で、31・32は19世紀前半代に、33は17世紀後半から18世紀前半代にそれぞれ比定される。

土瓶 37は体部が「く」の字状に大きく屈曲し、外面に白濁軸施軸の後、鉄軸で施文する。39は外面に化粧土を塗布した後、透明軸を施軸し、さらに鉄軸と緑軸で、草花文を上絵付けする。いずれも京焼系で19世紀前半代に比定される。

白磁

白磁には器種別には碗、紅皿、壺がある。碗（69）は器壁は全体に薄く、口縁部は外反する。近代以降の製品と考えられる。紅皿（41）は型作り成形で、外面は楕円状文を施文する。肥前系で19世紀前半代に比定される。壺（40）は体部が内彎し、内外面とも透明軸を施軸する。産地は不明である。

青磁

青磁には器種別では、皿、鉢、香炉、瓶、飾板があり、いずれも三田・王地山焼の製品で19世紀前半代に比定される。

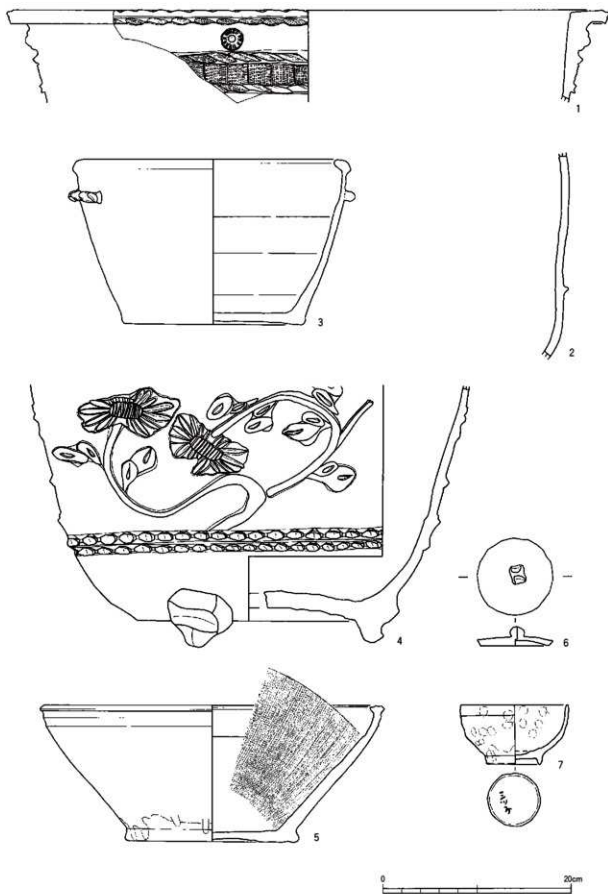
皿 皿には、ロクロ成形の丸皿（42）、型作り成形で口縁部を花卉状に整形する皿（43・44）、型作り成形の角皿（45～47）がある。

鉢 71は高台側面に透かしをもつ鉢である。

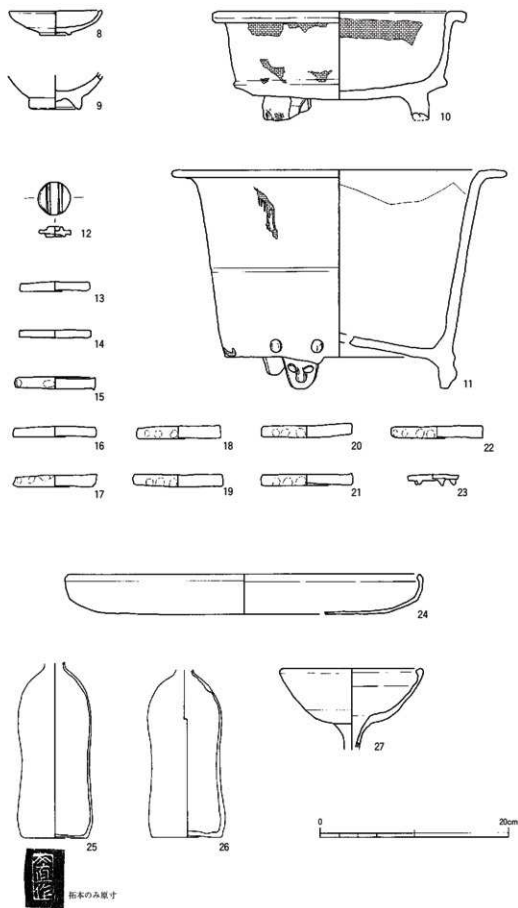
香炉 香炉（48）は体部が直立し、体部外面にへらで草花文を施文する。

瓶（49）は型作り成形で高台の平面形状が六角形を呈する。

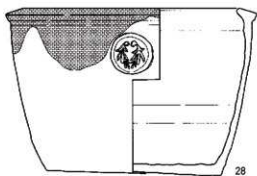
飾板 50は型作り成形で、陽刻の木の葉文を施文する。飾板と考えられる。



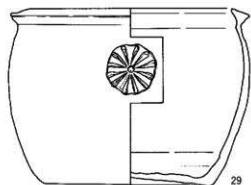
第7図 出土遺物(1)



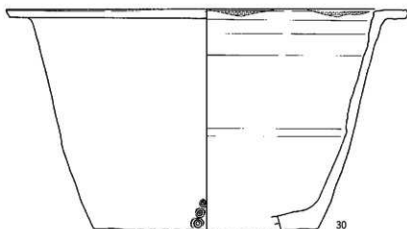
第8図 出土遺物(2)



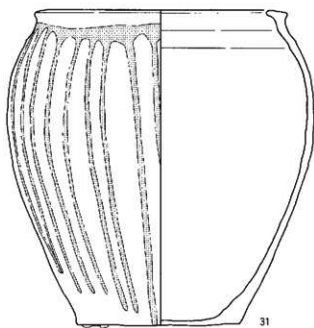
28



29



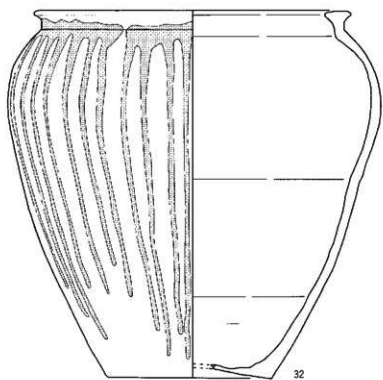
30



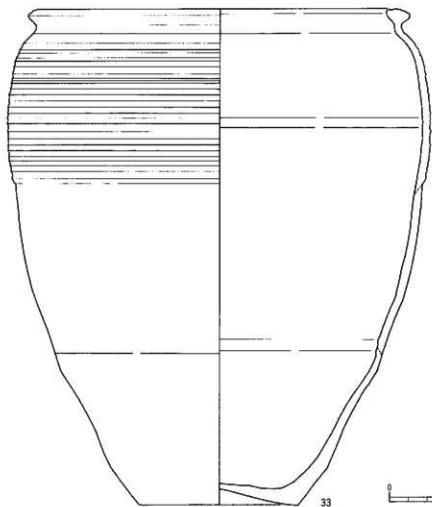
31



第9図 出土遺物(3)



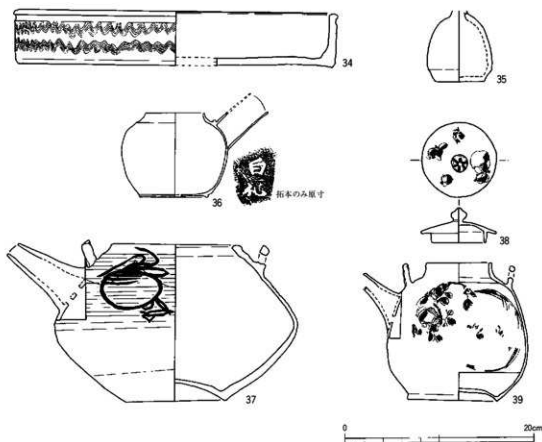
32



33

0 10cm

第10図 出土遺物(4)



第11図 出土遺物(5)

染付磁器

染付磁器には器種別では、碗、杯、皿、蓋、植木鉢がある。

碗 碗には産地別には肥前系 (58・59・60・81・82)、瀬戸・美濃系 (61・62・63・83)、三田・王地山系 (76・79)、産地不明のもの (84・86・87) がある。肥前系のもは、58・81は18世紀前半代に、59は18世紀後半代に、60・82は19世紀前半代にそれぞれ比定される。また、瀬戸・美濃系、三田・王地山系のもは19世紀前半代に比定される。産地不明の87は型紙摺りで近代以降の製品であろう。

杯 杯には明末～清初の景徳鎮窯産青花を模倣した三田・王地山焼 (56)、型紙摺りで施文する近代以降の製品 (66)、三田・王地山焼あるいは瀬戸・美濃系と考えられるもの (77・78) があり、66以外はいずれも、19世紀前半代の時期が考えられる。

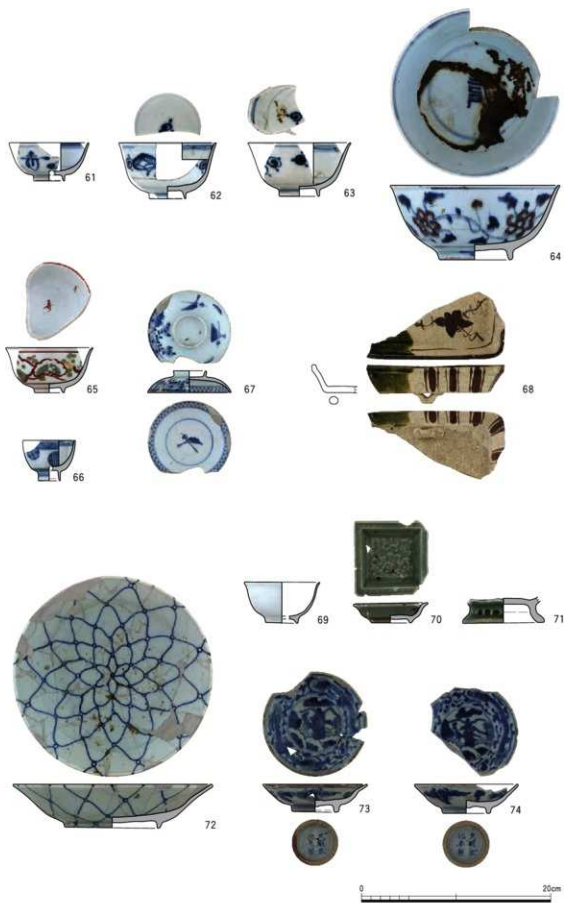
皿 皿も碗同様、産地別では、肥前系 (57)、三田・王地山焼 (51～54・72～75) があり、他の器種に比べて、三田・王地山焼の比率が高い。三田・王地山焼の皿には明末～清初の景徳鎮窯系青花を模倣したもの (51・72・75)、漳州窯系青花を模倣したもの (54) などがあり、いずれも19世紀前半代に比定される。肥前系のものには、内面に細かい草花文を描くものがあり、18世紀代に比定される。

蓋 蓋には肥前あるいは瀬戸・美濃系と考えられるもの (85) と京焼風の近代以降の製品 (67) とがある。85は19世紀前半代の時期が与えられる。

植木鉢 植木鉢 (80) は外面に山水文・蓮弁文を描くもので、三田・王地山焼で近世後半～近代のものであろう。



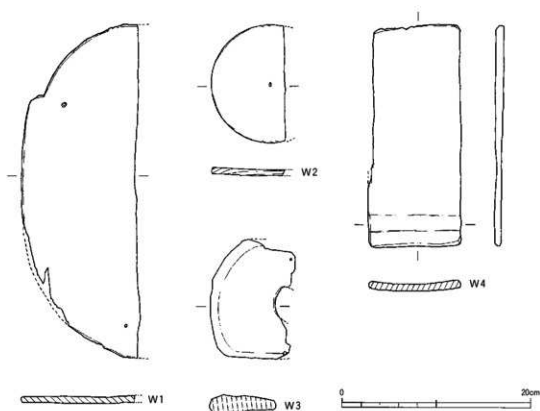
第12図 出土遺物(6)



第13図 出土遺物(7)



第14図 出土遺物(8)



第15図 出土遺物(9)

色絵磁器

色絵磁器には外面に草花文を描く、漳州窯写しの三田・王地山城の赤絵鉢(55)、内面に文字文、外面に牡丹唐草文を描く瀬戸・美濃系の鉢(64)、近代以降の製品と考えられ、底部外面に赤絵で寿字文を描く産地不明の端反碗(65)がある。55・64はいずれも19世紀前半代に比定される。

2. 窯道具

篠山城からは、窯道具と考えられる円盤状の焼台(13~23)が出土している。近世後半のものと考えられる。

3. 木製品およびその他の遺物

W1~W4はSK01より出土した木製品である。いずれも加工された板材で円形状のもの(W1~W3)と方形を呈するもの(W4)がある。W1は直径約35cmに復元される曲物容器の底板と考えられ、3枚を継ぎ合わせてつくるうちの1/3が残存している。W2も直径約13cmを測る曲物容器の底板と考えられ、約3/5が残存している。W3はW1・W2がいずれも厚さ約0.7cmであるのに対し、1~2cmと比較的厚く、平面の形状は一部に曲線が混じる方形状を呈している。一辺の中央付近に穿孔された痕跡がみられるため、2枚を継ぎ合わせてつくるうちの半分と考えられる。W4は長さ約23cm、幅約10cmを測る曲物の側板と考えられる。

SK01からはこの他に、円形に結わえられた縄(W5~W7)が出土している。これら曲物や縄などの遺物は、SK01の底部から集中して出土しており、遺構の性格を考える上で貴重な資料と考えられる。

第3表 出土遺物観察表(1)

No.	標記No. 写真図版No.	出土 遺物	種別	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法上の特徴	備 考
					口径	器高	底径			
1	第7図 写真図版5	SK01	無軸陶器	水鉢	—	—	—	頸部はほぼ直立。口縁部は水平に折り曲げる。口縁端部にヘラで削目を入れる。	頸部に型作りの菊花文を貼り付ける。	丹波焼。19C前半。
2	第7図 写真図版9	SK01	無軸陶器	甕	—	—	—	体部は若干、内湾。	器面 蔓草文を貼り付け施文。	丹波焼。19C前半。
3	第7図 写真図版5	SK01	施軸陶器	水鉢	(26.4)	(17.4)	18.7	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は楕円の玉縁状に肥厚。口縁端部を内側に引き出す。口縁部外面に粘土粒を塗って把手を2ヶ所貼付け。	内外面とも回転ナデ調整。内面 底部外面 施文。外面 灰釉あるいは鉄釉施釉。暗茶褐色(チョコレート色)に発色。	底部外面に砂目跡5ヶ所。丹波焼。19C前半以降。
4	第7図 写真図版5	SK01	無軸陶器	植木鉢	—	(26.9)	(23.2)	平底。中央部に穿孔1ヶ所。底部に3ヶ所開を貼付け。体部は内湾気味に斜め上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面に手づくね成形の草文文貼付け。底部外面 未調整。砂り着。	丹波焼。19C前半以降。
5	第7図 写真図版5	SK01	施軸陶器	播鉢	(35.5)	14.3	18.3	平底。外縁を浅く削って高台状に整形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部はほぼ直立。口縁部外面に四稜之象。口縁部上面は水平に瘤をもつ。口縁端部は内側に引き出す。	底部内面 同心円状に密に描き施文。体部内面 クシ描きの描目を密に施文。底部内面～体部内面 灰釉を薄く施釉。口縁部内面～体部外面 鉄釉を厚く施釉。暗茶褐色に発色。底部外面 未調整。露胎。輪状に砂目跡。	丹波焼。近代(明治)以降。
6	第7図 写真図版5	SK01	施軸陶器	蓋	8.0	2.6	7.2	円盤状。上面中央につまみを貼付。	外面 灰釉施釉。オリブ褐色に発色。内面露胎にふい茶褐色に発色。	丹波焼。
7	第7図 写真図版5	SK01	施軸陶器	椀	(11.2)	6.3	5.4	手づくね成形。高台は比較的幅が広く低い。体部は内湾してほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも灰釉施釉のうち、白濁釉を流し掛け。灰オレンジ色に発色。底部外面(高台裏) 露胎。	底部外面に「三ツが」卦へつ彫り。衣紋文(染地の写し)か。
8	第8図 写真図版5	SK01	施軸陶器	椀	9.5	2.6	3.3	高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の高台縁以下露胎。	産地不明。
9	第8図 写真図版5	SK01	施軸陶器	椀	—	(3.5)	5.1	器壁は全体に厚い。体部はわずかに内湾気味に斜め上方に延びる。高台裏は兜巾状に削り現す。	内外面とも透明釉施釉。灰黄色に発色。	高台登付の軸は力半取り。産地不明。肥前産。
10	第8図 写真図版6	SK01	施軸陶器	鉢	(25.0)	(11.5)	18.9	平底。底部に断面長方形の比較的大きい脚を3ヶ所貼付け。体部は直立。口縁部は外方に水平に折り曲げる形状。	内外面とも回転ナデ調整。内面 透明釉。口縁部外面 灰釉。体部外面 灰釉の二輪掛け分け。底部外面にも粗く透明釉施釉。	産地不明。粘土あま。あるいは輪調から瀬戸・美濃産か。19C前半以降。
11	第8図 写真図版6	SK01	施軸陶器	植木鉢	(32.7)	23.2	23.5	平底。観面状の脚を3ヶ所貼付け。体部は直線的にはほぼ直上に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	内外面とも回転ナデ調整。底部にアデ輪状に穿孔1ヶ所。脚の上面に円形浮文を2個ずつ計6ヶ所貼付け。内面 赤土塗布。暗茶褐色に発色。口縁部内面～体部外面 灰釉施釉。赤緑灰色に発色。底部外面 露胎。	産地不明。粘土あま。丹波焼か。19C前半以降。
12	第8図	SK01	土製品	蓋	3.5	1.1	2.0	円盤状。上面に棒状の把手2本貼付け。下面に同心円状の突起貼付け。	上面 施釉。赤褐色に発色。下面 露胎。	ミニチュア製品。
13	第8図 写真図版9	SK01	窯道具	焼台	7.5(径)	1.0(厚さ)		手づくね成形。円盤状。	全面に指ナデ調整。	にふい黄褐色。用途不明。窯道具の焼台(せんべい)か。
14	第8図 写真図版9	SK01	窯道具	焼台	7.6(径)	0.9(厚さ)		手づくね成形。円盤状。	全面に指ナデ調整。	にふい褐色。用途不明。窯道具の焼台(せんべい)か。

第4表 出土遺物観察表(2)

No.	標記No. 写真図版No.	出土 遺物	種別	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法上の特徴	備 考
					口径	器高	底径			
15	第8回 写真図版9	SK01	窯道具	焼台	8.6 (径)	1.3 (厚さ)		手づくね成形。円盤状。全面に指ナゲ調整。	にぶい褐色。用途不明。窯道具の焼台(せんべい)か。	
16	第8回 写真図版9	SK01	窯道具	焼台	8.9 (径)	1.0 (厚さ)		手づくね成形。円盤状。全面に指ナゲ調整。	にぶい黄褐色。用途不明。窯道具の焼台(せんべい)か。	
17	第8回 写真図版9	SK01	窯道具	焼台	8.9 (径)	1.4 (厚さ)		手づくね成形。円盤状。全面に指ナゲ調整。	にぶい褐色。用途不明。窯道具の焼台(せんべい)か。	
18	第8回 写真図版9	SK01	窯道具	焼台	9.0 (径)	1.5 (厚さ)		手づくね成形。円盤状。全面に指ナゲ調整。	にぶい褐色。用途不明。窯道具の焼台(せんべい)か。	
19	第8回 写真図版9	SK01	窯道具	焼台	9.5 (径)	1.4 (厚さ)		手づくね成形。円盤状。全面に指ナゲ調整。	にぶい黄褐色。用途不明。窯道具の焼台(せんべい)か。	
20	第8回 写真図版9	SK01	窯道具	焼台	9.6 (径)	1.3 (厚さ)		手づくね成形。円盤状。全面に指ナゲ調整。	にぶい黄褐色。用途不明。窯道具の焼台(せんべい)か。	
21	第8回 写真図版9	SK01	窯道具	焼台	9.7 (径)	1.3 (厚さ)		手づくね成形。円盤状。全面に指ナゲ調整。	にぶい黄褐色。用途不明。窯道具の焼台(せんべい)か。	
22	第8回 写真図版9	SK01	窯道具	焼台	9.7 (径)	1.4 (厚さ)		手づくね成形。円盤状。全面に指ナゲ調整。	にぶい黄褐色。用途不明。窯道具の焼台(せんべい)か。	
23	第8回 写真図版9	SK01	窯道具	焼台	5.4 (径)	1.1 (厚さ)		手づくね成形。円盤に台形状の脚を5ヶ所貼り付け。	にぶい黄褐色。焼台。焼成は堅緻。	
24	第8回 写真図版6	SK02	土師器	焙烙	(37.1)	4.3	(30.6)	型作り成形。平底。体部はわずかに内湾してはほぼ直上に延びる。口縁部はわずかに内傾する。	内外面ともココロナテ調整。口縁部外面 強いココロナテ調整。	褐色。底部内外面に塗着。19C前半以降か。
25	第8回 写真図版6	SK02	施輪陶器	徳利	—	(18.5)	6.5	平底。器壁は全体的に非常に薄い。体部はわずかに屈曲して直上に延び、上部は上つぼまりになる所。蓋形徳利。	内外面ともロクロナテ調整。内面にロクロ目明瞭。体部外面 鉄輪施輪の後、灰被り。底部外面未調整・露胎。	底部外面に「直内」施部印。丹波焼。19C前半。
26	第8回 写真図版6	SK02	施輪陶器	徳利	—	(17.7)	7.0	平底。器壁は全体的に薄い。内面に比べてやや厚く重い。体部はわずかに屈曲して直上に延び、上部は上つぼまりになる所。蓋形徳利。	内外面ともロクロナテ調整。内面にロクロ目明瞭。体部外面 鉄輪施輪。No25に比べて輪脚はガラス質が強い。底部外面未調整・露胎。	No25に類似するが、近代以降の製品か。丹波焼。
27	第8回 写真図版6	SK02	無輪陶器	漏斗	(14.6)	(8.5)	—	体部は内湾気味に斜め上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚し、内側に捻り出す。	内外面とも回転ナテ調整。内面 灰輪施輪。帯緑灰色に発色。外面露胎。	にぶい赤褐色。外面灰被り。丹波焼。
28	第9回 写真図版6	SK02	施輪陶器	壺	(23.1)	12.4	18.3	平底。体部はほぼ直線的に上方に延びる。口縁部は横方向に拡張。上面に水平な蓋面をもち、蓋部は斜め上方につまみ出す。体部外面上位に円盤状の型作りの草花文を貼り出す。全体の形状はNo29に類似する。	内外面とも回転ナテ調整。底部外面は未調整。内面→口縁部外面 白濁施輪。体部外面 灰輪(透明輪)施輪。底部外面露胎。	外面はにぶい黄褐色。丹波焼。19C前半以降か。

第5表 出土遺物観察表(3)

No.	標記No. 写真図版No.	出土 遺構	種別	器種	量 (cm)			形制・成形技法の特徴	文様・調整技法上の特徴	備 考
					口径	器高	底径			
29	第9図 写真図版7	SK02	輪軸陶器	甕	21.5	18.6	17.8	平底。体部はわずかに内湾気味にはぼ直上に延びる。口縁部は上面に端面をもち、端部を斜め上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面の上位に造作りの青花文を貼付ける。口縁部外面→内面 灰輪軸施。暗茶褐色に発色。外面 鉄輪あるいは赤土部輪軸施。茶褐色に発色。底部外面露胎で飯目状。砂付着。	外面に火ぶくれが目立つ。丹波焼。19C前半以降か。
30	第9図 写真図版7	SK02	輪軸陶器	鉢	42.0	(23.4)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部上面→外面 灰輪軸施。暗茶褐色に発色。内面 露胎。	丹波焼。近代以降か。
31	第9図 写真図版7	SK02	輪軸陶器	甕	(26.6)	23.5	18.0	平底であるが、總け寄みと重ね焼きの際のトナギが付着して凹凸があり、安定しない。体部は直線的に斜め上方に延び、中位で緩やかに屈曲して、ほぼ直上に延びる。口縁部は水平に横方向に拡張し、口縁端部は斜め上方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。外面 灰輪を柄杓掛けで胎状に施輪。さらに灰輪が薄く露出。底部外面は露胎で未調整。	丹波焼。19C前半以降。
32	第10図 写真図版8	SK02	輪軸陶器	甕	30.4	35.1	17.0	平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、上位で屈曲し、稍部は深い凹部を呈する。口縁部は短く直立し、横方向に水平に拡張し、上面に水平に端面をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。内面 全面に灰輪軸施。黒褐色に発色。外面 全面に赤土部輪軸施の後、柄杓掛けで胎状に灰輪を施輪。底部外面は露胎。輪状に砂付着。	丹波焼。19C前半以降。
33	第10図 写真図版7	SK02	輪軸陶器	甕	(37.2)	52.5	(16.9)	平底。体部はわずかに内湾気味にはぼ直上に延びる。口縁部は横方向に水平に拡張する。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部上面 沈濁さ。体部外面上部凹部(金銅製の夾鉢を模倣か)。内面 赤土部を粗く塗布。外面 赤土部を密に塗布。底部外面 露胎。砂付着。	丹波焼。17C後半→18C前半か。
34	第11図 写真図版8	SK02	無輪軸陶器	甕	(33.3)	(5.7)	(33.2)	平底。体部は短く直立する。	体部外面に磨接きの波状文施文。	露前焼。17C前半。
35	第11図 写真図版8	SK02	輪軸陶器	徳利	—	(5.3)	5.1	平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、下位で屈曲。内湾・内傾し斜め上方へ延びる。頸部は直立か。	外面 回転ナデ調整。鉄輪あるいは鉄流漿を施輪。黒褐色に発色。底部 外面 露胎。	色調および胎土から露前焼か。
36	第11図 写真図版8	SK02	無輪軸陶器	急須	6.2	8.9	(7.0)	全体に器壁は非常に薄い。平底。体部は内湾。口縁部はわずかに内傾。体部上面に1※所柱状の肥手を貼付ける。注口部は欠損。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面上半 胡瓶状に灰胎に発色。外面 灰泥塗塗布。	露前焼。19C前半。
37	第11図 写真図版8	SK02	輪軸陶器	土瓶	13.5	16.4	10.7	底部の径は小さく、器輪底状を呈する。体部は斜め上方に立ち上がり、中位で大きく屈曲。全体に算盤玉状を呈する。口縁部上面に水平に端面をもつ。体部上面に2※所杓手と1※所直線的な注口を貼付ける。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面上半 凹線数条施文。体部外面上半に一部、白濁輪軸施の後、鉄輪で施文。さらに全面に透明輪軸施。内面および外面の体部下半以下、露胎。露胎部は淡赤褐色。	産付着。産地不明。京焼系。19C前半以降。
38	第11図 写真図版8	SK02	輪軸陶器	土瓶蓋	—	3.1	5.6	山笠形。上面中央部に宝珠形をつまみを貼付け。	水挽きロクロ成形。内外面とも回転ナデ調整。外面(下側) 露胎。外面(上側) 白化粧を施した後、透明輪軸施。鉄輪あるいは呉須で草花文施文。	黄色味を帯びた白白色。京焼系。19C前半以降。

第6表 出土遺物観察表(4)

No.	標記No. 写真図版No.	出土 遺物	種別	器種	法 量 (cm)			形制・成形技法の特徴	文様・調整技法上の特徴	備 考
					口径	器高	底径			
39	第11図 写真図版 8	SK02	輪軸陶器	土瓶	6.7	14.5	9.4	平底。上げ底風。体部外面下方に形骸的な髷を3ヶ所貼付け。体部は大きく内湾して立ち上がり、中央で屈曲し、内側に湾して上方に延びる。口縁部は短く直立。体部外面上方に約手2ヶ所、注口1ヶ所貼付け。	内外面とも回転ナマ調整。内面および底部外面露胎。外面 白化粧土塗布。透明輪軸輪。外面に灰赤および緑赤で華文施文。	底部外面に窪付帯。京焼系。19C前半以降。
40	第12図	SK01	白磁	壺	—	(10.5)	—	平底。高台は割縁。体部は内湾して斜め上方に延びる。	内外面とも透明輪軸輪。灰白色に染色。	断面観察から一部、酸化炎染成。産地不明。
41	第12図	SK01	白磁	缸皿	4.4	1.2	1.4	短作り成形。高台は形骸化する。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は水平に端面をもつ。	内面 透明輪軸輪。灰白色に染色。外面 型押しで蘭蕨状に施文。露胎。	断面観察。19C前半。
42	第12図 巻首図版 5	SK01	青磁	皿	(9.4)	3.3	(5.1)	底部は唇菊底。体部はわずかに内湾気味に斜め上方に延びる。	底部内面に型押しで華文施文。内外面とも青磁輪軸輪。オリーブ灰色に染色。露胎部は淡赤褐色に染色。	高台登付の輪は方形。三田・王地山焼。19C前半。
43	第12図 巻首図版 5	SK01	青磁	皿	(10.2)	(2.5)	(4.9)	短作り成形。高台の平面形状は六角形。体部は斜め上方に延びる。口縁部は大きく外方に開く。口縁端部は波状に成形。	内面 型押しで除刺の華文・人物文施文。外面無文。内外面とも青磁輪軸輪。オリーブ灰色に染色。	高台登付の輪は方形。三田・王地山焼。19C前半。
44	第12図 巻首図版 5	SK01	青磁	皿	(9.6)	(2.4)	(3.8)	短作り成形。高台の平面形状は六角形。体部は斜め上方に延びる。口縁部は大きく外方に開く。口縁端部は波状に成形。	内面 型押しで除刺の華文施文。外面 無文。内外面とも青磁輪軸輪。オリーブ灰色に染色。	高台登付の輪は方形。三田・王地山焼。19C前半。
45	第12図 巻首図版 5	SK01	青磁	角皿	— /たて	2.4 /横	2.4 /器高	短作り成形。高台の平面形状は四角形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	内面 型押しで除刺の花鳥文・慶文施文。外面無文。内外面とも青磁輪軸輪。暗オリーブ色に染色。	高台登付の輪は方形。三田・王地山焼。19C前半。
46	第12図 巻首図版 5	SK01	青磁	角皿	9.5 /たて	5.2 /横	2.5 /器高	短作り成形。高台は比較的形状が広い。体部はわずかに内湾気味に斜め上方に延びる。口縁部は水平に折り曲げる。	内面 型押しで花鳥文・慶文施文。外面無文。内外面とも青磁輪軸輪。暗オリーブ色に染色。露胎部は部分的に淡赤褐色に染色。	高台登付の輪は方形。三田・王地山焼。19C前半。
47	第12図 巻首図版 5	SK01	青磁	角皿	9.1 /たて	6.9 /横	1.9 /器高	短作り成形。平面形状は長方形。高台の平面形状は長方形。高台は幅が比較的に低い。体部は下位で屈曲して、直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げる形状。	内面 型押しで動物(象)文施文。内外面とも青磁輪軸輪。灰赤りのため、オリーブ灰色に染色。露胎部は淡赤褐色に染色。	高台登付の輪は方形。三田・王地山焼。19C前半以降。
48	第12図 巻首図版 5	SK01	青磁	香炉	(11.5)	(10.0)	(6.8)	平底。高台は比較的形状が広く高い。体部は直立。口縁端部は丸みをもつ。	内面の体部下半以下 露胎。内面の体部上半~外面 青磁輪軸輪。体部外面へうらりて蘭蕨2葉を施文。草花文・蘭蕨1葉を施文。淡灰緑色に染色。	高台登付の輪は杖形。内面 青磁輪軸輪。19C前半。
49	第12図 巻首図版 5	SK01	青磁	瓶	—	(1.9)	6.5	短作り成形。高台の平面形状は六角形。底部より明確に染色。	内面および底部外面 露胎。外面 青磁輪軸輪。	三田・王地山焼。19C前半。
50	第12図 巻首図版 5	SK01	青磁	海板	10.5 /長さ	3.7 /幅	1.6 /厚さ	短作り成形。上面は型押しで蘭蕨の木霊文施文。	全面に青磁輪軸輪。オリーブ灰色に染色。	三田・王地山焼。19C前半。
51	第12図 巻首図版 4	SK01	焼付磁器	皿	(13.8)	(12.4)	—	体部はわずかに内湾して斜め上方に延びる。	内面 呉須 草花文・果籠1葉。外面 無文。	やや青味を帯びた灰白色。外面 明末~清初の中製青花を模倣。三田・王地山焼。19C前半。

第7表 出土遺物観察表(5)

No.	標記No. 写真図版No.	出土遺物	種別	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法上の特徴	備 考
					口径	器高	底径			
52	第12版 巻首図版4	SK01	夾付磁器	皿	—	(0.5)	(6.0)	高台は細く低い。 内面 草花文か。外面 界線3条。底部外面 界 線1条。「大明弘治」年 (製)跡。	明末~清初の景徳 鎮産青花写し。 三田・王地山焼。 19C前半。	
53	第12版 巻首図版4	SK01	夾付磁器	角皿	— /たて	9.0	2.4 /器高	摺作り成形。体部はわず かに内湾。口縁部は上面 に深面をもつ。口縁部の 四隅は削入。	内面 草花文施文。外面 磨地化された唐草文施 文。内面の景象は流石 文。	高台貫付の輪はカ ギ取り。三田・王 地山焼。19C前半。
54	第12版 巻首図版4	SK01	夾付磁器	皿	(13.2)	3.3	7.1	高台は比較的幅が広い。 体部はわずかに内湾気味 に斜め上方に延びる。口 縁端部は尖り気味。	内面 花鳥文・丸に寿字 文施文。外面 無文。	輪は生掛けのため ノリが悪い。器面 に虫喰いが認めら れる。やや青味を 帯びた灰白色。練 土質写し。三田・王 地山焼。19C前半。
55	第12版 巻首図版4	SK01	色絵磁器 (赤絵)	鉢	—	—	—	体部はわずかに内湾気 味。	内面 赤絵と緑軸地で花 文施文。外面 赤絵と緑 軸地で草花文施文。	輪は生掛けのため ノリが悪い。器面 に虫喰いが認めら れる。やや青味を 帯びた灰白色。練 土質写し。三田・王 地山焼。19C前半。
56	第12版	SK01	夾付磁器	杯	—	(2.7)	3.5	高台は細く高い。やや外 方に「ハ」の字状に開く。 体部は内湾気味に斜め上 方に延びる。	内面 無文。外面 不明 文・界線2条。幾何学 文。	やや青味を帯びた 灰白色。明末~清初 の景徳鎮青花写し か。三田・王地 山焼。19C前半。
57	第12版	SK01	夾付磁器	皿	(18.7)	3.2	(10.1)	高台は断面三角形状で比 較的低い。体部はわずかに 内湾気味に緩やかに斜 め上方に延びる。口縁部 は外方に開く。	内面 界線1条・細かい 牡丹唐草文・界線2条。 外面 唐草文・界線1・ 2条。	構成はややあま く、淡灰白色に 染。器面に細かく 貫入。肥前系。18 C代か。
58	第12版	SK01	夾付磁器	碗	—	(12.1)	(4.6)	器壁は全体に厚い。高台 は幅が広く比較的高い。 体部は内湾気味に斜め上 方に延びる。	内面 斜格子文・界線2 条。外面 丸文・界線3 条。底部外面 コンヤク印 判の五弁花文。	やや青味を帯びた 灰白色。肥前系流 石見産。くらん 手。18C後半。
59	第12版	SK01	夾付磁器	碗	(10.1)	(4.9)	(3.5)	高台は比較的細く高い。 体部は内湾して斜め上 方に延びる。口縁端部は 尖り気味。	内面 無文。外面 割 で二重割目文・界線2条 施文。	やや焼成があま く、内面に灰被 り。肥前系。くら わんか手。18C後 半。
60	第12版 巻首図版4	SK01	夾付磁器	碗	10.8	5.7	4.2	高台は「ハ」の字状に外 方に開く。体部は内湾気 味に斜め上方に延びる。 口縁端部は尖り気味。	内面 菱形文・界線2 条・桃文。外面 桃・草 花文・界線1条。	高台貫付の輪は拭 き取り。三田・王 地山焼。19C前半 以降。
61	第13版	SK01	夾付磁器	碗	(8.2)	(4.1)	(3.4)	高台は比較的細く高い。 体部は斜め上方に延び る。	内面 太い界線1条。外 面 界線1条。人形の寿 字文・草花文・界線1 条。	白色。瀬戸・美濃 系。19C前半。
62	第13版	SK01	夾付磁器	碗	(12.2)	6.0	(3.7)	高台は比較的細く高い。 体部はわずかに内湾気 味に斜め上方に延びる。口 縁部はわずかに外反す る。	内面 不明文・界線1 条・唐草文。外面 界 線1条・唐草文か・界線 1条。	器面に貫入が入 る。瀬戸・美濃系。 19C前半。
63	第13版	SK01	夾付磁器	碗	(10.2)	(5.7)	(4.1)	高台は比較的細く高い。 体部はわずかに内湾気 味に斜め上方に延びる。口 縁部はわずかに外反す る。	内面 不明文・界線1 条・唐草文。外面 界 線1条・唐草文か・界線 1条。	器面に貫入が入 る。瀬戸・美濃系。 19C前半。
64	第13版	SK01	色絵磁器	鉢	17.8	7.9	7.3	高台は比較的幅が広く 低い。体部は内湾気味 に斜め上方に延びる。 口縁端部は尖り気味。	内面 界線1条。文字 施文。外面 鳥頭・魚 輪・緑軸地で牡丹唐草文 施文。須に漆みが著し い。	高台貫付の輪は丁 草に拭き取り。瀬 戸・美濃系。19C 前半以降。

第8表 出土遺物観察表(6)

No.	標記No. 写真図版No.	出土 遺物	種別	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法上の特徴	備 考
					口径	器高	底径			
65	第13図 巻首図版4	SK01	色絵磁器 (赤絵)	碗	(9.1)	(4.8)	(3.0)	高台は比較的小さい。体部は内湾気味に斜め上方に延びる。口縁部はわずかに外反。	底部内面 赤絵で寿字文。外面 赤絵・緑釉・黄釉・青釉・桃色釉で界線1条。草花文・界線2・1条施文。	産地不明。近代以降か。
66	第13図	SK01	染付磁器	杯	(5.4)	4.3	(2.2)	高台は非常に高く高い。体部はわずかに内湾気味にはほぼ直上に延びる。口縁部は尖り気味。	内面 不明文。外面 幾何学文・丸文・欄目状文・界線2条。	器底折り。近代以降か。
67	第13図 巻首図版4	SK01	染付磁器	碗蓋	8.7	2.4	3.4	つまみは若干。外方に開く。体部は内湾。口縁部は尖り気味。	内面 界線1条・不明文・界線2・1条・扇に新約文。外面 菊花文・雲文・杯・扇に新約文。	京焼風。近代以降か。
68	第13図 巻首図版3	SK02	施釉陶器	内付	—	(4.2)	—	型作り成形。平底。底部に環状の脚を貼付ける。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部上面に水平に端面をもつ。	内面 鉄釉で草花文。外面 一部、緑釉施釉。外面 鉄釉施釉。一部、緑釉施釉。底部外面 露胎。	内面に白目印部。表面露胎地蔵頭向付。17C初期(伝授品)か。
69	第13図	SK02	白磁	碗	9.8	4.8	3.3	高台は断面三角形状で比較的低い。器壁は全体に厚い。体部は内湾し斜め上方に延びる。口縁部は外反。	内外面ともに透明釉施釉。白色に発色。	産地不明。近代以降か。
70	第13図 巻首図版5	SK02	青磁	角皿	7.9 /たて	7.9 /横	2.1 /器高	型作り成形。高台の平面形状は方形。器壁は全体に厚い。高台は比較の幅が広く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に大きく開く。	内面 型押しで花鳥文・動物文を施文。内外面とも青磁釉施釉。内オリーブ灰色に発色。露胎部は全体に淡赤褐色に発色。	高台器付の輪は方山焼。19C前半。
71	第13図 巻首図版5	SK02	青磁	鉢 or 香炉の 底部	—	(2.7)	8.6	高台は比較の幅が広く高い。「ハ」字状に外方に開く。高台の側面に3個1単位のリ彫の透かしを4ヶ所入れる。	内外面とも全面に青磁釉施釉。暗青緑色に発色。露胎部は淡赤褐色に発色。	高台器付の輪は方山焼。三田・王地山焼。19C前半。
72	第13図 巻首図版4	SK02	染付磁器	皿	20.8	4.6	9.8	高台は比較の幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも一重瀬目文。外面 無文。	青味を帯びた白色。明末～清初の器底露胎青花を模倣か。三田・王地山焼。19C前半。
73	第13図 巻首図版4	SK02	染付磁器	皿	10.8	3.9	5.0	器壁は全体に厚い。高台は幅が広い。体部は内湾気味に緩やかに斜め上方に立ち上がり、上位で屈曲。口縁部は外方に開く。	水挽きロクロ成形の後、型打ちで体部に凹部を付ける。内面 界線2条・雲龍文か。外面 界線1条・雲龍文・界線1・3条。底部外面「大明成化年製」銘。	口縁部 口紅。青味を帯びた灰白色。明末～清初の青花写し。三田・王地山焼あるいは瀬戸・美濃系か。19C前半以降。
74	第13図 巻首図版4	SK02	染付磁器	皿	(10.7)	3.1	4.9	器壁は全体に厚い。高台は幅が広い。体部は内湾気味に緩やかに斜め上方に立ち上がり、上位で開く。	水挽きロクロ成形の後、型打ちで体部に凹部を付ける。内面 界線2条・雲龍文か。外面 界線1条・雲龍文・界線1・3条。底部外面「大明成化年製」銘。	口縁部 口紅。青味を帯びた灰白色。明末～清初の青花写し。三田・王地山焼あるいは瀬戸・美濃系か。19C前半以降。
75	第14図 巻首図版4	SK02	染付磁器	角皿 (鉢)	— /たて	— /横	— /器高	型作り成形。体部は直線的に斜め上方へ延び、口縁部は水平に折り曲げる形状。口縁部を波状にヘアで切り落とす。	内面 蝶文・窓絵に草花文等を描く。外面 窓絵に草花文か。	明末～清初の青花写し。三田・王地山焼。19C前半以降。

第9表 出土遺物観察表(7)

No.	標記No. 写真図版No.	出土 遺構	種別	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法上の特徴	備 考
					口径	器高	底径			
76	第14図 巻首図版4	SK02	夾付磁器	碗	9.9	5.7	3.3	器壁は全体に厚い。高台は細く高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 界線1条・松竹梅文。外面 界線1条・山水樓閣文・界線1・1条。底部外面「成化年製」銘。	成或はややあまの青味を帯びた灰白色。三田・王地山焼。19C前半。
77	第14図 巻首図版4	SK02	夾付磁器	杯	6.9	3.2	3.2	高台は総ノ目高台。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は大きく外方に開く。口縁端部は尖り気味。	内面 草花文・「永安辛製」銘。外面 山水文・漢詩文。	高台登付の軸はカキ取り。三田・王地山焼あるいは瀬戸・美濃系か。19C前半。
78	第14図 巻首図版4	SK02	夾付磁器	杯	(6.1)	4.8	(3.3)	器壁は全体に厚い。高台は幅が広く低い。体部はほぼ直立。口縁端部は丸みをもつ。	内面 無文。外面 界線2条・葱絵風に草花文・界線1・2条。	青味を帯びた白のはかキ取り。三田・王地山焼あるいは瀬戸・美濃系。19C前半。
79	第14図 巻首図版4	SK02	夾付磁器	碗	(8.8)	6.3	(4.3)	高台は幅が広く低い。体部は直立。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	内面 無文。外面 山水文・草花文・界線2条。底部外面「口吉」銘。	高台登付の軸はカキ取り。三田・王地山焼あるいは瀬戸・美濃系か。19C前半。
80	第14図 巻首図版6	SK02	夾付磁器	植木鉢	—	(14.4)	10.6	平底。底部の中央に1ヶ所穿孔(直径2.4cm)。高台は浅く削り出す。体部は内湾気味にほぼ直上に延びる。体部下半に脚(獣足)を3ヶ所貼付け。	内面および底部外面 露胎。外面 舞やかな気味で山水文(海浜石橋文)・界線2条・簡略化された蓮葉文・界線2条。	底部外面に砂付。近世後半~近代。三田・王地山焼。
81	第14図	SK02	夾付磁器	碗	6.5	3.2	2.3	器壁は全体に厚い。高台は比較的幅が広く低い。体部は内湾気味に斜め上方に延びる。	内面 無文。外面 簡略化された草花(雲葉)文・施文。	高台登付の軸はカキ取り。やや青味を帯びた灰白色。肥前系。流石見産。18C前半。
82	第14図	SK02	夾付磁器	碗	10.7	5.7	4.1	底部の器壁は比較的厚い。高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部はわずかに外反。	内面 圏線と丸文・界線1条・松葉文。線描きで施文。外面 圏線と丸文・宝尽し文・格子状文・界線2条。	灰白色。肥前系か。19C前半以降。
83	第14図	SK02	夾付磁器	碗	(8.7)	(5.1)	(3.7)	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部はわずかに外反する。	内面 太い界線1条・界線2条。外面 やや内湾気味で太い界線1条・草花文か。	瀬戸・美濃系。19C前半。
84	第14図 巻首図版4	SK02	夾付磁器	碗	(10.6)	5.8	4.3	高台は削り出し高台。「ハ」字状に大きく外方に開く。体部は直線的にやや上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 界線1条・界線2条・木ノ実文。外面 草花文・界線1条。	肥前系あるいは瀬戸・美濃系か。19C前半以降。
85	第14図 巻首図版4	SK02	夾付磁器	碗蓋	(9.6)	2.8	(4.0)	つまみは外方に開く。体部は内湾気味に上方に延びる。	内面 界線1条・菱形文・界線1・2条・木ノ実文か。外面 草花文・界線1条。	肥前系あるいは瀬戸・美濃系か。19C前半以降。No84と一対。
86	第14図 巻首図版4	SK02	夾付磁器	碗	(10.2)	4.4	(3.5)	器壁は全体に薄い。高台は細く低い。体部は内湾して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 無文。外面 松葉文か。	高台登付の軸はカキ取り。近世不明。手塚形碗。19C前半以降。
87	第14図	SK02	夾付磁器	碗	10.3	3.8	3.8	高台は比較的細く高い。器壁は全体に比較的厚い。体部はわずかに内湾気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 比較的鮮やかな内湾気味で山水樓閣文を描く(雲紙回りか)。外面 無文。	高台登付の軸は丁寧にカキ取り。近世以降か。京焼風。

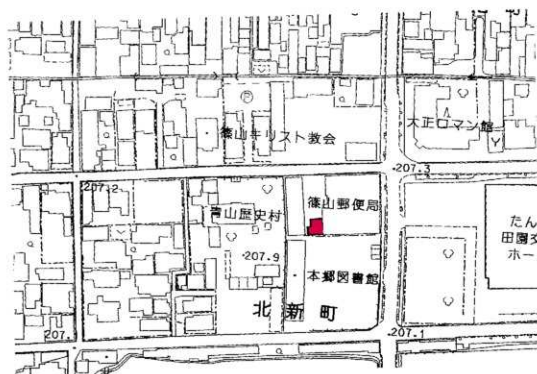
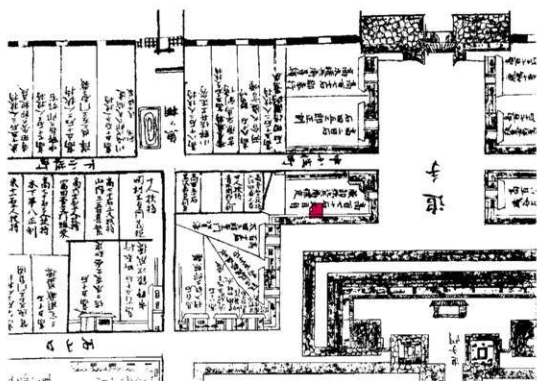
第4章 まとめ

第1節 遺構について

調査の結果、調査区の東端部が郵便局建築の際の掘削により失われていたものの、ほぼ全域で土境や溝を検出した。遺構の性格としては、用途のわからない小規模なものが多かったが、SK01・SK02・SD04など、武家屋敷を構成する遺構が残存していた。これは、武家屋敷絶後の早い時期に駐車場等として整地されたために残りがなかったものと思われる。調査範囲が狭いために個々の遺構の性格は断定できないものの、出土した遺物は19世紀代の王地山城などがあって、遺構の年代を示しているものと思われる。調査範囲が道路とは塙を挟んだ屋敷地の南部に該当することから、調査範囲は建物と塙との間に挟まれた庭の一部分にあたるものと思われる。また、調査範囲の旧表土が田畑の耕作土の特徴を示していることから、武家屋敷絶後に畑地として利用されたか、あるいは武家屋敷の庭の一部を利用して畑作をしていたことが推測できる。後者の場合でも、このような利用のされかたは武家屋敷では必ずしも特殊例ではなく一般的であったようである。

今回の調査区は、史跡篠山城跡の北側に近接し、周辺は本郷図書館、たんば田園交響ホール、篠山市役所など公共施設が建ち並ぶ一角である。確認された遺構は、出土した遺物から19世紀代の武家屋敷跡の一部と考えられるが、この時期の篠山城およびその周囲の屋敷地の状況を伝える絵図（『丹州篠山城郭之繪圖』天保8（1837）年 以下、繪圖と記載 巻首図版2）と対照すると、篠山城の追手門（大手門）に隣接する地点、中小姓町に位置している。さらに、繪圖の外濠および追手門、道路割などの位置から判断すると、「高百七十七石大目付服部弥次兵衛保定」と記載された武家屋敷跡を発掘したと考えられる（第16図）。

「服部弥次兵衛保定」邸（以下、服部邸）は、ㄇ字状に区画された屋敷群の東に突出して位置し、追手大通りに門を構えた屋敷である。周囲の屋敷地に記載されている石高は、五十石から服部邸を上回る二百石もみられるが、追手大通りに面し、周囲が塙で囲まれた中級の武家屋敷であったと考えられる。外濠の内側、旧二の丸には石高七百石から八百石の「御家老」と記載された屋敷地が確認されるが、外濠の周囲に整然と配置された屋敷地には、東門正面に「高百七十七石大目付坪井源次成貞」と記載された服部邸と同じ「大目付」の職名がみられる他は、「町奉行」・「郡奉行」など、職名が記された屋敷地はわずかである。平成9年に篠山町教育委員会（当時）によって、東端部の通りひとつ東側に位置する旧所差町の武家屋敷跡の調査が行われている（第43次調査）が、確認された遺構は、出土した江戸時代後期の「キタ」と書かれた陶片などから、今回の調査と同様、19世紀代の武家屋敷跡の一部、繪圖に記載された「米七石三人扶持北部権吾是矩」邸（以下、北部邸）であったと考えられている。繪圖では、南北約300mの通りに面して約25軒の屋敷地が構成されており、周囲の屋敷地の石高は、米十石未満の五石から九石と記載されている。発掘調査および現地地形による境界からは、北部邸は開口幅約17m、奥行約40m、敷地面積約680㎡と復元されているが、繪圖でみる限り、今回調査を行った服部邸あるいは周辺の屋敷地とも敷地面積では大きな違いはみられない状況である。石高あるいは役職などによって、服部邸が篠山城の追手門に隣接する重要な位置に屋敷を構えていたことは容易に想像できるが、今回の調査で確認された遺構からは、屋敷地内の詳細な状況を明らかにすることができなかった。しかし、後述するように、在地の丹波焼や王地山城、三田焼などを使用して、当時の武家屋敷の生活の一端を伺



第16図 「丹州徳山城郭之繪圖」(天保8年)と調査区的位置

い知る資料がえられたことは、大きな成果であったと考えられる。

第2節 遺物について

篠山城からは、近世後半の19世紀前半代を中心に土師器、無軸陶器、施軸陶器、白磁、青磁、染付磁器、色絵磁器の製品が比較的まとまって出土している。その出土傾向を見ると、壺・壺・鉢などの大型の陶器では在地産の丹波焼が、また、碗・皿などの小型の磁器製品では、同じく在地産の三田・王地山焼の製品の占める割合が、他の近世後半の都市遺跡たとえば、摂津の伊丹郷町、兵庫津遺跡、播磨の明石城下町、姫路城下町に比べて著しく高いことが特徴としてあげられる。

丹波焼は、近世に入ると、四斗谷川周辺の中核窯以外に、その周辺窯でも、鹿野窯（西脇市）、相野窯（三田市）などの播鉢専焼窯が相継いで開窯し、播鉢の生産量が飛躍的に増大し、備前焼に代わって、京・大坂・江戸を中心に広範囲に流通するが、18世紀前半以降、堺・明石産の播鉢の白頭とともに、丹波焼播鉢は次第に市場から姿を消して行く。その後、丹波焼では18世紀後半～19世紀前半にかけて、播鉢に代わって、壺あるいは壺の変形である徳利が流通商品の中心となり、特に徳利は貧乏徳利、えへん徳利、傘徳利、海老徳利など様々な変化に富んだ製品が生産されるようになると言われている。しかし、近世後半の丹波焼の消費動向については、その出土事例は少なく、従来消費地での調査結果からは不明な部分が少なくなかった。

今回の調査では、灰釉を船状に柄掛ける壺、外面に貼花文を施す鉢、あるいは「直作」銘を刻印する徳利など、近世後半代の丹波焼の消費動向を表す器種が比較的まとまって出土し、丹波焼の生産地に隣接する篠山山下での消費の実態が部分的にはあるが、ある程度明らかになった。また、碗・皿などの磁器類では、三田・王地山焼の青磁、染付磁器が数多く出土し、それらには、龍泉窯系青磁あるいは、明末～清初の青花磁器を模倣したものが多く見られる。

三田焼は、18世紀末に京焼の陶工欽古堂亀佑の指導の下に、三田の豪商神田惣兵衛の資金援助によって成立したとされ、また、王地山焼は、篠山藩の藩窯として、同じく欽古堂亀佑の指導の下に、19世紀前半の文政年間に関窯したとされている。両者の製品は、在銘あるいは箱書きなどのあるものを除いて、考古学的には現在のところ、判別が困難であるため、ここでは三田・王地山焼として報告している。三田焼に関しては、三田市教育委員会による流通調査によって、京・大坂・江戸の三都などの都市部を中心に、19世紀前半から中頃にかけて、武士あるいは富裕な商人などを主な受容層として、九州地方から関東地方にかけての広い範囲で流通していたことが明らかになっており、その背景には、江戸時代後半の文人趣味の興隆とともに、江戸時代以前にわが国にもたらされた中国製の青磁・青花に対する需要が増大したことが上げられる。とくに、三田・王地山焼の主力製品の一つである青磁生産に関しては大橋康二によって、18世紀前半に生産が開始され、18世紀後半以降、全国的に広く流通するようになる肥前系の青磁染付碗が、18世紀末の広東碗の出現とともに生産を縮小し、その時期に京焼系の三田・王地山焼で青磁の生産が始まるということが指摘されている。

このように、従来、窯跡の調査結果から、指摘されていた三田・王地山焼の流通の実態について、今回の調査では、生産地に隣接する消費地における出土傾向から、そのことが裏付けられ、従来不明であった、近世後半の地方窯の消費動向の一端がある程度明らかになったと言える。

篠山城跡に関する報告書一覧

第2章 篠山城旧三の丸跡 発掘調査履歴 掲載報告書

1. 『篠山城旧三の丸跡』—たんば田園交響ホール建設に伴う調査概要報告書— 平成元（1989）年
2. 『篠山城旧三の丸跡発掘調査の概要』—第1次～第15次調査— 平成4（1992）年
3. 『篠山城旧三の丸跡』—第11次調査・第13次調査・第14次調査— 平成4（1992）年
4. 『篠山城旧三の丸跡』 第21次調査 平成5（1993）年
5. 『史跡篠山城跡』—第18次調査・第10次調査・第7次調査—『篠山城旧三の丸跡』—第28次調査— 平成6（1994）年
6. 『篠山城旧三の丸跡』 第31次調査・第32次調査 八角坊ノ坪遺跡 平成8（1996）年
7. 『篠山城旧三の丸跡』 第43次調査—一宅地造成工事に伴う旧御宗町武家屋敷跡発掘調査報告書— 平成10（1998）年
8. 『篠山城旧三の丸跡 発掘調査報告書』—個人住宅建築に伴う第47・49～56次調査— 平成11（1999）年
9. 『篠山城旧三の丸跡』—車庫及び倉庫建築に伴う第48次発掘調査— 平成11（1999）年
以上、篠山町教育委員会
10. 『篠山城旧三の丸跡』 第60次調査—都市計画道路城西線工事に伴う発掘調査— 平成14（2002）年
11. 『下立杖古宮跡範囲確認調査概要報告書』 平成15年度市内道路発掘調査概要報告書 平成16（2004）年
以上、篠山市教育委員会
12. 篠山市（篠山町）教育委員会編 実績報告書

史跡 篠山城跡に関する調査報告書

1. 『史跡 篠山城跡』二の丸石垣保存修理事業報告書 平成3（1991）年
2. 『史跡 篠山城跡』 第17次調査—下水道管理設に伴う発掘調査報告— 平成5（1993）年
3. 『史跡 篠山城跡』一〇の丸発掘調査報告書— 平成7（1995）年
4. 『史跡 篠山城跡』—第22次調査— 平成7（1995）年
5. 『史跡 篠山城跡』天守台石垣修理工事報告書 平成11（1999）年
6. 『国指定史跡 篠山城跡』 平成11（1999）年
7. 『史跡 篠山城跡』一〇の丸範囲発掘調査概要報告書— 平成12（2000）年
以上、篠山町教育委員会

御下屋敷跡に関する調査報告書

1. 『御下屋敷跡』—兵庫医科大学篠山病院外来診療棟建築に伴う発掘調査— 平成10（1998）年
2. 『御下屋敷跡』 第2次調査—兵庫医科大学篠山病院看護婦宿舍棟及び研修医棟建築に伴う発掘調査— 平成11（1999）年
以上、篠山町教育委員会

本文中の引用・参考文献一覧

- 『兵庫津遺跡 Ⅱ』 兵庫県教育委員会 2004
- 『伊丹郷町の陶磁器の様相』 伊丹郷町研究会 2003
- 伊野近富 「土師器」 『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 1995
- 『下相野遺址』 兵庫県教育委員会 1992
- 長谷川眞 「中世丹波境の変遷と技術移入・導入」 『中近世土器の基礎研究XⅧ』 日本中世土器研究会 2003
- 長谷川眞 「甕類にみる近世丹波境」 『関西近世考古学研究Ⅱ』 関西近世考古学研究会 2003
- 堀内秀樹 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」 『東京大学権蔵文化財調査室紀要Ⅰ』 東京大学文化財調査室 1996
- 長谷川眞 「中近世の丹波境」 『やきものふるさと丹波』 兵庫陶芸美術館 2005
- 『史跡篠山城跡 整備基本構想』 篠山町教育委員会 1999
- 『国指定史跡篠山城跡大書院復元工事竣工記念誌 二〇世紀から二一世紀世紀へのおくりもの』 篠山市 2000
- 『八上城・法光寺城跡調査報告書』 篠山市教育委員会 2003

写真図版



調査地遠景 (南から)



調査地より篠山城跡を望む (北西から)



調査前状況 (南東から)



調査区全景 (西から)



調査区全景 (北東から)



調査区南壁土層断面 (北西から)



SK01 (東から)



SK02 (南から)



SD04 (西から)



調査区東半部 (南から)



調査区西半部 (南から)



SK01 土層断面 (西から)



SK05 土層断面 (北から)



SD01 土層断面 (南から)



調査状況 (東から)



SK01 掘り下げ状況 (北東から)



出土遺物(1)



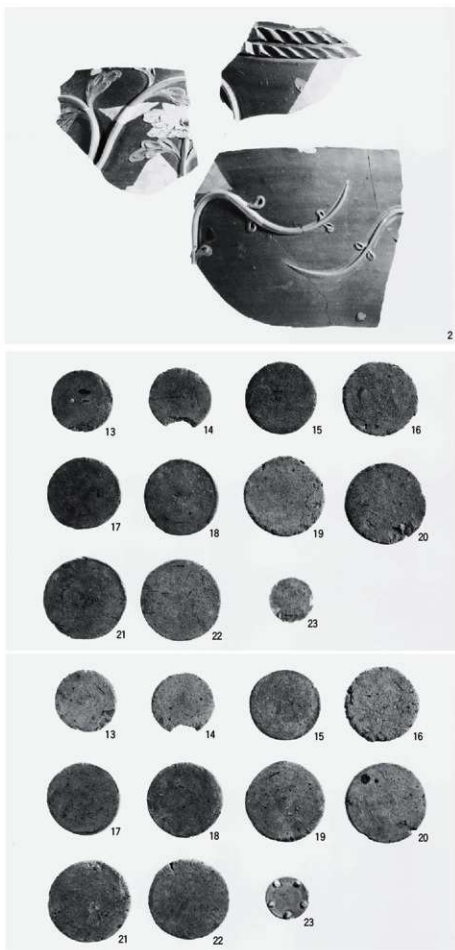
出土遺物(2)



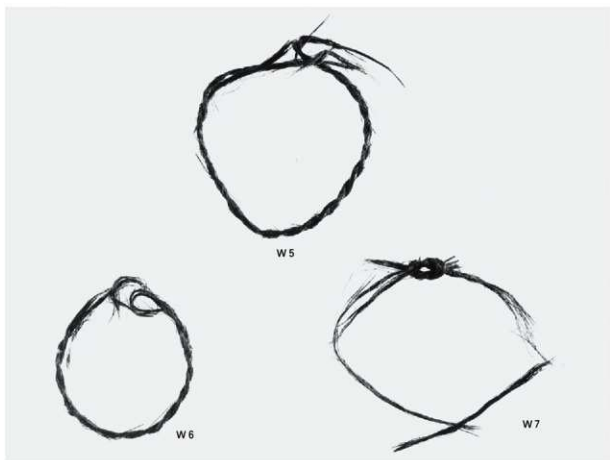
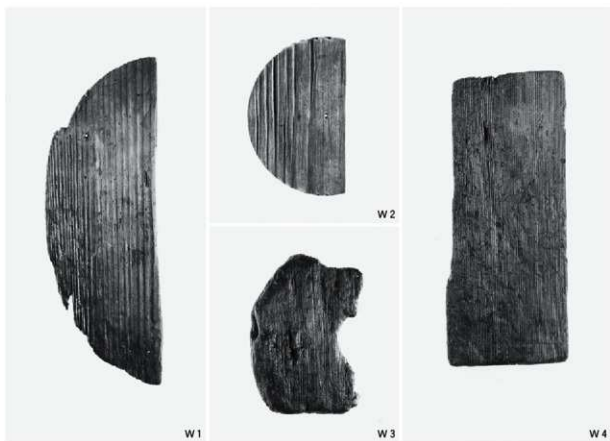
出土遺物(3)



出土遺物(4)



出土遺物(5)



出土遺物(6)

報告書抄録

よみがな	ささやまじょうきゅうさんのまるあと							
書名	篠山城田三の丸跡 第41次調査							
副書名	篠山郵便局庁舎簡易小増築工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第290冊							
編著者名	仁尾一人・池田正男・岡田章一・山下史朗							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2-1-5 TEL 078-531-7011							
発行年月日	西暦2006(平成18)年2月17日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
篠山城 田三の丸跡 第41次調査	篠山市 北新町	28221	960445	35度 4分 31秒	135度 12分 59秒	本発掘調査 970217～ 970220	71㎡	篠山郵便局 庁舎簡易小 増築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
篠山城 田三の丸跡 第41次調査	城下町	江戸時代	土坑・溝	肥前系陶器、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、織部焼、京焼系陶器、備前焼、丹波焼、王地山焼			特になし	

兵庫県文化財調査報告 第290冊

篠山市

篠山城旧三の丸跡

—篠山郵便局庁舎簡易小増築工事に伴う発掘調査報告書—

平成18年2月17日発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2-1-5

TEL 078-531-7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5-10-1

TEL 078-341-7711

印 刷 船場印刷株式会社

〒670-0994 姫路市定元町4-2

TEL 0792-96-3535
